
SSSS

風待月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SSSS

【Nコード】

N0589BA

【作者名】

風待月

【あらすじ】

——現代に『魔法』があったら、どうなると思う？ なんでもできる『魔法使い』にも、どうにもならない事はある。

たった30年前に《魔法》が現れた世界、常人以上超人未満の《魔法使い》たちの、普通以上特殊未満の学生生活。

【＊検証用実験文章です。お見苦しい点があることを理解して頂いた上でお楽しみ頂ければ嬉しいです。感想・指摘などの形で検証に

協力頂けたら幸いです】

00 | 000 6月2日のはじまり (前書き)

この小説ページを開いてくださってありがとうございます。

個人的な実験として書いてますので、この話は一般的に推奨される書き方と違い、ある程度読んで頂かないと、理解できない内容になっています。

00 | 000 6月2日のはじまり

「歯あ食いしばって腹に力入れろよ！」

「え！？ ちょっと堤^{つみ}さん——！？」

^{つみとおじ}堤十路の人生における願いは、普通に生きること。

心身健全・学業大成・金運招福・大願成就。いずれも高望みなんてしていない。

風邪で寝込んでも入院しなければOK。100点は無理でも赤点取らなければ問題なし。裕福でなくても借金なく生活できればいい。ついでに明かすと、恋愛成就なんて願望も全く持っていない。

何事もほどほどで十分。出る杭は打たれる。過ぎたるは及ばざるがごとし。

当然、揉め事なんてまっぴら。

基本は待ち、受身の姿勢。トラブル解決不可能なら逃げることも躊躇しない。男らしくないという文句は聞き流す。

だから家族からは『なあなあ主義』と言われる。

そんな彼が……いや、普通なら誰でもそうだが。

「轢いた——！？」

街中でオートバイに乗ったまま、人間に突っ込むことになるのは想像もしていなかった。

推定体重70kgの物体に、車体+2人の人間≡350kg超の重量が、それなりの速度でまともに激突。はねられた男は、カエルが潰れたような声を上げて吹っ飛んだ。

しかしブレーキをかけながらの衝突なので、死ぬほどではないだろう。

「よし」

「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」

「前の学校で何回もやったから慣れた」

「どんな学校ですか!？」

「そんなことより――」

残るもう1人が、人身事故を正当防衛と証明してるので、なにも問題ない。

仲間がオートバイにはねられるという突然の事態に、呆気にとられた男の手には、黒光りする金属の塊。

我に返った瞬間、それを向けられるのは、想像にかたくない。

「あっち、本次の担当でいいのか？」

「え!？ あ、はい!」

リアシートに乗った学生服の少女が、構えた長大な杖を男に向けた途端、空間に淡く光る幾何学模様が描かれる。

それはあたかも魔法陣。

「実行!」

その一言で小規模ながら、超常の落雷が発生し残る男に直撃した。手にしていた金属塊を取り落とし、薄い煙を上げて崩れ落ち、見ていると不安になる痙攣けいれんをする。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」

「ちゃんと手加減しましたよ!？」

「銃が暴発したらどうする気だったんだ？」

「えーと……結果オーライということで……」

「それで、どうすればいい？」

「追ってください！」

「了解」

はね飛ばしてうめいてる男と、感電してうめいている男は、誰かがなんとかしてくれるだろうと判断し、十路はオートバイを発進させる。

「やっちゃまった……」

堤^{つみとおじ}十路の人生における願いは、普通に生きること。

揉め事なんてまっぴら。

家族からは『なあなあ主義』と言われている。

だから。

《魔法使い》の少女を後ろに乗せて、誘拐犯をオートバイで追いかけるなんて、目標から真逆の時間は望んでいなかった。

00 | 000 6月2日のはじまり (後書き)

1 / 1 修正

00 | 010 AM10:47 静岡県御殿場市某ファミレスにて（前書き）

検証事項…ぱっと見読めない固有名詞

この小説に登場する諸々は、実在の人物や企業・団体とは関係ありません。実在の地名は出てきますが、微妙に違ったりします。

00 | 010 AM 10:47 静岡県御殿場市某ファミレスにて

「お待ち致しました」

ドリンクバーのコーヒート、オレンジジュースしか乗ってなかったテーブルに、ウェイトレスの手で、チョコバナナパフェと伝票が置かれた。

「サークス」

「ごゆっくりどうぞ」

朝食には少々遅く、昼食には早い時間の、静岡県御殿場市。

7月を過ぎれば登山客が増えるのだろうが、まだ6月のために人もそう多くない、富士山麓の一角に構えるファミレスで、1組の男女が向かい合うテーブルから、ウェイトレスが離れた。

早速パフェの器にスプーンを突っ込むのは、中学生と思える小柄な少女。

それを頬杖をついて眺めているのは、少年と呼ぶには少し過ぎた高校生。

少女の雰囲気は天真爛漫。てんしんらんまん

大胆に足を出していても色気は感じず、健康そうな印象が先に立つ。幼さが残る明るい顔立ちには、どこかイタズラ小僧のような愛嬌がある。

げっ歯類の動物を連想。そう聞けばリスやハムスターが思い浮かぶだろうが、トゲだらけのヤマアラシも当てはまる。

青年の雰囲気は怠惰。たいだ

『鋭い目つき』と言えば聞こえはいいが、気が抜けていれば人相が悪いだけ。量販店のポロシャツとジーンズに包まれた体は細身の筋肉質だが、背筋を丸めて頬杖をついていれば、そんな体付きは隠されて、ただだらしない。

例えるなら野良犬。ただし今はエサをもらって満足そうに昼寝しています。

少女の名前は堤南十星。つつみなとせ

青年の名前は堤十路。つつみとおじ

顔立ちも雰囲気もあまり似ていないが、2人の関係は同じ姓が示している。

「なとせ。ほら、ついてるぞ」

パフエグラスに半分顔を突っこんでいたために、鼻の頭についたクリームを、テーブル越しに手を伸ばしてナプキンで拭いてやる。

「さんきゅー」

「久しぶりに会うけど、お前、なんも変わってないなー……」

「相変わらず食べ方が子供っぽい？」

「……まあ、そんなところ」

Tシャツの上に羽織ったミリタリーベスト、今はテーブルの隅に乗せているキャスケット帽、履いているのはデニムのホットパンツにバスケットシューズ。

少年にも見えてしまう南十星の服のことを考えていたが、それは口に出さない。

「悪いな、なとせ……平日なのに呼び出すことになって」

「気にしない気にしない。たった2人の兄妹きょうだいじゃん。それに今さら

学校休んだところで、あたしゃ補習受ける成績だし」

「お前なあ……」

「兄貴、そんなことより」

連絡自体はそれなりにしていたものの、直接顔を合わせるのは数カ月ぶり。

はるばる飛行機に乗って会いに来た南十星は、スプーンを置いて、再会と転機を祝った。

「退学おめでと——を、っ!？」

多大な怒りと、ほんの少しのやるせなさと、わずかばかりの『コイツやっぱりアホだ』という再認識が込められた、十路のデコピンが炸裂した。

額を押さえた南十星、二人掛けのソファを涙目でのたうち回る。

「なにがめでたいかこの愚妹ぐまいがあ!？」

「『シャバの空気ウメー』って感じっしょ!？」

「規律の凄まじい学校だったよ! 刑務所出たような気分ではあるよ!」

「だったらめでたいじゃん!」

「寮を追い出されたら生活に困るんだけどな!？」

「こっち来りゃいーじゃん。おじさんたちも『そうしろ』って言うてくれてたよ?」

「いや、気持ちは嬉しいけど……」

早急に解決しなければならぬ現実的な話になり、そして店内の非難の目にも気づき、声のトーンが下がる。

2人の両親は、すでに他界していて、子供の頃に生活していた家もない。

だから南十星は、十路が全寮制学校に進学したのを機に、伯父のところ与生活することになり、そして十路は学生寮が唯一の寢床だったのだが――

「じゃあ、どうすんの？　いつもの『なるようになるさ』的ななあ主義を發揮しても、どうもできないっしょ？」

その質問に答えず十路は、A4サイズの封筒を差し出した。

「なにそれ？」

「学校案内、だろうな……」

封筒の下部に印刷されているのは、『学校法人 修交館学院』という文字と、兵庫県神戸市の住所。

すでに封は切つてあるので、遠慮なしに南十星は中身を確認する。

「わお、すごい学校じゃん」

厚手のパンフレットには、広い敷地に建つ、まだ新しい校舎群と、充実した学校設備の数々がカラー印刷されている。

私立校に多い付属型。いわゆるエスカレーター式なのか、法人全体だと幼稚園から大学まで同じ名前の学校があるらしい。

「このパンフ、兄貴が頼んだの？」

「いや。1週間くらい前に、なぜか寮の机の上にあった」

「なんで？」

「俺が訊きたいよ……」

それはつまり、通常の郵便物とは違って、学校の事務局も寮監の手も通すこともなく、正体を知られないよう誰かが直接、十路にこ

れを渡そうとしたということ。

中身がパンフレットだけなら、十路の今後を心配する誰かの親切と考えることもできるが、同封されていたのは、それだけではなかった。

転入時に必要な書類もろもろ。授業料免除の申請用紙。学生寮の入居に提出する書類その他。

極めつけは、既に十路の顔写真が貼られている、修交館学院高等部3年生の学生証。

「どーやら俺は、その学校からスカウトされてるらしい……正直、不気味なんだけど？」

「まさか兄貴の退学と関係してんの？」

「わからない。関係ないと断言できないけど、関係あるとは考えにくいんだが……」

十路をスカウトとするために、退学させる暗躍があったとは考えられないが、見知らぬ学校の誰がどこで十路の退学話を聞いたかという疑問が残る。

「でも、こんな物まで渡されたからな……」

そう言いながら十路が見るのは、ソファの隣に置いたケース。

縦30cm、横40cm、厚さ10cmほどの、アタッシェケースのように合金に覆われている小型のものだ。

「そーいやさっきからソレ、気になってたんだけど、中身なんなの？」

「秘密だ。お前には見せられない」

「エロ本ぐらいどーってことないって」

「すぐそっち方面を連想するところに、お前のダメっぷりが表れて

る」

「男が女に見せられないモンって、それくらいじゃないじゃん？」

「アホか」

「あ、妹モノとか制服モノならまだしも、母親モノとかホモだったら引くな……」

「……………話を戻すな？」

人一人のこととはいえ、これだけの用意をするとなると、金銭的に決して安くない額を使うことになるはずだが。

「どこかの誰かが心配してくれるのは嬉しいけど、ここまでする価値が、俺にあるか？」

「あるじゃん？ 特殊な才能と経験の持ち主」

「それこそありえない」

十路はコーヒーカップを持ち上げて、すする間の一呼吸分で、自嘲にならない準備をしてから口を開く。

「——お前もわかってるだろ？ それが俺が育成校に通うことになって、今回退学になった理由だ」

「じゃあ？」

「わからない。だから、これからその学校に行ってみて、直接話を聞いてみる」

「いきなり行って大丈夫なの？」

「もう電話してアポは取ってるよ」

南十星がストローでオレンジジュースに浮かんだ氷をつつく。

「……そこに転入するかどうかは、その話次第ってこと？」

「そういうこと。条件次第ではこの不気味な誘いに乗ってもいいし、

無理だと判断したら……おじさんに迷惑かけるかもしれない」

「メーワクかけるって言うても……こっちに来るって意味じゃないよね？」

南十星は歳相応のすねた顔で、十路の顔を見つめる。

「ああ……そうなるな」

対して十路は歳には似つかわしくない、諦めのような老齢さで溜息をつく。

そんな様子に南十星は気まづげにストローを動かして、迷った末に口を開いた。

「……さっきは茶化したけど、あたしは兄貴が退学になって、よかったと思う」

「まあ、な……」

「兄貴はどうなの？」

「生活には困るけど、もうあんな事に関わらなくて済むから、ホッとしてるのが正直なところ」

「だけど、もう一緒には暮らせないんだ……？」

「俺はお前の近くにいるべきじゃない。俺たちは親がいないから、家庭の事情がややこしいし、なにより普通に生きれる境遇じゃない」
「……………」

無言になった南十星の、ストローを動かす手が止まった。

「……あいつら、ふざけてる」

人懐こい瞳が細くなり、獣じみた光が宿る。普段はリスの愛らしさに隠れた、ヤマアラシの攻撃心。

「なとせ」

何気ない呼びかけに冷たさがこもる。怠惰な野良犬が伏せたまま、軽く牙を覗かせた。

「だって……みんなして兄貴のこと、バカにしてるじゃん……」

それだけでヤマアラシは大人しくなり、シュンとして逆立てた針毛を寝かせた。

「仕方ない」

そして野良犬は苦笑して、ヤマアラシを慰めて、リスの毛皮をかぶせようとする。

「ただでさえ、俺は世界で一番夢がなくて、一番面倒の多い人種なんだぞ？」

言葉を切って、コーヒークップを空にして。

「――俺は《魔法使い》なんだ。しかも出来損ないの」



世界には、《マナ》を操り《魔法使い》と呼ばれる者が扱う《魔法》が存在する。

しかし秘術ではない。誤解と偏見があったとしても、その存在は使えない常人にも広く知られたもの。

そして古よりのものではない。たった30年前に発見され、未だそのあり方を模索している新技術。

なによりもただのオカルトではない。その仕組みの詳細は明確になっていないものの、証明が可能な理論と法則。

知識と経験から作られる、再現可能な奇跡、それが現代で《魔法》と呼ばれるモノ。

その力は、多岐に渡る分野で応用が期待されている。『空気を操る魔法』と『空を飛ぶ魔法』による金属化学の新素材開発、『炎を操る魔法』の応用で新エネルギーの研究、『治癒の魔法』で最先端医療でも不可能だった治療法の確立などなど。

つまり現代社会における《魔法使い》は、優れた科学者であり、技術者であり、研究者でもあると、世間的には定義されている。

しかし存在そのものは知られたものであるが、『魔法使い』は日常的な存在ではない。

その価値が発揮されるのは、人々の生活に直接関わる部分ではないため、まず知られないからだ。

加えて『魔法』を扱える人間は非常に少ないという理由もある。人ならざる知識を処理するための特殊な脳機能を持つ人間は、遺伝学的に数千万分の一の確率でしか誕生しない。

そのため現代では、世界的にも貴重な人的財産として扱うことを、法律で定めている国がほとんど。幼少期の検査で適正があると判断された子供は、レベルごとにそういった全寮制の学校に集められて生活し、一般教養と並行して専門技術の教育を受けることになる。

十路が通っていたのも、そういった特殊教育機関、通称『育成校』。

完全寮制、生活費も学費も全て国費で賄われ、次世代の発展に必

要不可欠な人的財産を、未来を作り出す人材へと育てると謳った国家機関。

堤十路は、そんな学校を強制退学させられた。
彼が『出来損ない』になったから。

00|010 AM10:47 静岡県御殿場市某ファミレスにて（後書き）

1／5 前書き修正

1／10 ルビがくどいので削除

00 | 015 PM15:23 インターミッション01 (前書き)

インターミッション（任意の合間）を初っ端のこの辺に挟むのもどうか……と思いつつも挿入。

今回は本筋のストーリーには直接は関係ない、オマケ的文章という形で使っています。

「つばめ先生、入りますよ……」

「お、来たね、ジュリちゃん」

「わざわざお茶を淹れさせるのに、授業中に呼び出すの、やめてください……」

「いや、そうじゃなくて」

「急に『お鍋食べたくなった』なんて言われても用意できません……」

「いや、それでもなくて」

「じゃあ今日の晩ご飯、なにが食べたいんですか……?」

「どうしてわたしが口を開くと、そういう用事だと思うの?」

「いつもそんな用事で呼び出されるからですよ……」

「授業中には呼んでない! わたしもそこまで非常識じゃないつもりだよ!？」

「じゃあ今日は……?」

「ちゃんとした部活」

「今朝の事件でなにか連絡が来たんですか?」

「ううん、別口。転入生が来るから、駅まで迎えに行ってほしいの。簡単な資料は携帯電話に送っておくよ」

「それこそ私じゃなくてもいいじゃないですかぁ……」

「わたし、忙しいんだよね」

「いま思いつきり遊んでるじゃないですかぁ……」

「まーそれは冗談として、わたしより、キミたちがやるべきことだと思うから」

「はい?」

「『普通の転入生』じゃないの」

「……そういうことですか」

「諸々のことを考えた結果でもあるし、しかも今日は――」

「部長、学校にいないんでしたね……」

「うん。ついでに3年生の男のコだし、やっぱり同年代の女のコの方がいいと思うからね」

「え？ 先輩なんです？」

「そうだよー。6月のこんな中途ハンパな時期に来る謎の転校生。パンくわえて走ってたら曲り角でぶつかって恋に発展しそうとか思わない？」

「や、全然……というか何年前の少女マンガですか」

「最近の若いモンは形式美を理解せんのお」

「ともかくわかりました……お迎えには行きます」

「あ。さっき届いたって連絡があったから、迎えに行く時には、部屋の新しい備品を使って」

「はい？ 備品？」

「そんでさあ、約束の時間からもう5分過ぎてるから、急いでね」

「それ先に言ってくださいよお！？」

00 | 020 PM 15 :: 37 木次樹里（前書き）

伏線いっぱい。しかも今回の実験文章ではなかなか回収しないのを

普通列車と新幹線を乗り継いで4時間余、南十星との話し合いを終えて、新神戸駅のロータリーに堤十路^{つみとおじ}はやってきた。

退寮直後に近場のファミレスで家族の話し合い、そしてすぐさま長距離移動としてきた割には軽装で、合金製のケースをぶら下げただけの、ほぼ身一つ。

「遅い……」

高校生の腕には少々高価なミリタリーウォッチを見て、周囲を見渡す。

この動作は何度も繰り返した。

先日、修交館学院の事務局に連絡した際には、駅に迎えを寄越すという話だったが、それらしい人物と接触できずに、すでに予定時刻から20分。

「住所わかってるし、勝手に行くか……?」

迎えと行き違いになることを気にしつつも、バス停の方向へ向かうとした時。

「止まって止まって……!??」

オートバイが駅前のロータリーに入ってきたのが、嫌でも目についた。

スクーターではなく、本格的なオフロードタイプのオートバイに乗っているのは、学生服のままという根性の入った（というか運転には危険な）格好の女子学生。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

その間、加害者となった女子学生は、頭を何度も下げ続けていた。

「念のため弁解しておくけど、興奮して鼻血出してたわけじゃないからな？」

「や、わかってます……」

そう言いながらも警戒するように、手は学生服のスカートに伸びて、裾を押さえている。

「わかってますけど……やっぱり、見えました……？」

「ヒップアタックを男の顔面に叩き込むのと、スカートの中を知られるの、果たしてどちらが恥ずかしいものなのだろうか？」

「……中身を知られる方でしょうか」

「いや、一瞬の事でなにがなんだかわからなかったし、その直後の衝撃の方がものすごかった」

「そうですか……そうですよね……」

「ただ親切心で言わせてもらおうと……今はしてるオレンジのチェック柄のパンツ、後ろに穴が開いてたから、換えた方がいいと思う」
「バッチリ見てるじゃないですかあ！？」

会ったばかりの女の子に泣きそうな顔をされて、十路は『やはり言うのではなかった』と少し後悔。

「……不可抗力だけど、見たのは確かだから俺が悪かった。だけどそっちも単車を暴走させなければ、こんな事にはならなかった。お互いそれぞれ悪い部分がある。だからこれで相殺。以後忘れる。謝るものなし。OK？」

「お、おーけいです……」

一気に言われ、頭で考えるよりも前に、反射的にカクカクうなずいてしまう女子学生。

オートバイを『オート』と呼ぶ、聞き慣れない言い方にも、不自然に思う暇がなかった。

「それじゃあ、気をつけろよ」

体を張って受け止めた甲斐あって、女子学生にケガはなかったよ
うだから、安心して予定通りにバス停に向かおうとして。

「堤さん？ どちらに行かれるんですか？」

その女子学生に呼び止められた。

「俺、名乗ったっけ？」

「……あ。自己紹介、してませんでしたね……」

鼻血を出していた間に確認していたのか、女子学生の手には携帯電話。
電話。

その液晶に十路の顔写真が写っている。

「えー……遅れた上に、ケガをさせてすみません」

とても言いずらそうに、そして気恥ずかしそうに、彼女は頭を下げる。

「修交館学院の理事長から、お迎えを言い付かった者です……」

「学生、だよな？」

「はい……高等部1年、木次樹里きすきじゅりです」

『迎えを寄越す』としか聞かされていなかった上、平日ならば、学校の職員が来るものと十路は勝手に思っていたが、しかしやって来たのはオートバイを爆走させる2つ年下の女子高生。改めてその姿を改める。

6月で1年生。衣替えをしたばかりで、プリーツの効いたミニスカートも、リボンタイも、半袖のスクールブラウスも、まだ糊のりとアイロンが効いている夏服。

それに包まれているのは、特別背が高いわけでも低くもない、肉感的とは言えないがそれでも女の子らしい細身の体。

ミディアムボブの髪に収まった、人の良さそうな顔立ちは、なぜか犬を連想。それも愛玩用の小型室内犬ではなく、よく躡しつけけられた猟犬のような、野性と知性を併せ持つ大型種。

オートバイという要素がなければ、どこかにいそうな普通の女の子。騒がれるほどではないが、男子生徒の間で『ちよつと気になる女子』の地位を確立していそうな印象を十路は覚えた。

「え〜〜〜〜……早速ですけど、堤さん」

先ほど以上に言いにくそうに、木次樹里と名乗った少女が、申し訳なさそうに口を開く。

「バイクの免許、持ってます……？」

「なあ……木次きすき、さん？ 質問に質問を返して申し訳ないけどな？」

初対面で呼び捨てはまずかろうと、一応『さん』付けはして丁寧な口調にしたものの、十路は半眼で、すでに目が泳いでいる樹里の顔を覗き込む。

「まさか免許を持ってない？」

「……動かし方は知ってるんですけどね……」

「うおい！？ 最悪だな！？ 無免許運転かよ！？」

「私だって意味わかんないですよお！ でもあれに乗って行けってつばめ先生があ！」

「……おけ。わかった。了解。意味は全然わからないけど、問い詰めても仕方ないってのはわかった」

つまり、その『つばめ先生』とやらは、十路が免許を持っているのを織り込み済みで、樹里をオートバイに乗せて行かせたということ。

それでも無免許運転を実行するのはどうかと思うが、もはや遅い。

「俺の分のメットは？」

「大丈夫です。用意してます」

「だったら問題ない——」

そう言って、路肩に駐車されているオートバイの方を振り返って。

「……………？」

十路の眉根が軽く寄る。

それはデュアルパーパスと呼ばれる、未整地も市街地も走れる汎用・中型のオートバイ。しかしメーカーカタログで、同型のものを見た記憶がない。

この手のタイプはエンジンが露出してるものだが、これは機関部までボディに覆われている上、通常車体右側についているマフラーが、目立たないように後部と半一体化している。

鼻血もようやく止まり、手に付いた血は渴いてるが、それでも十路は気をつけて赤と黒でペイントされたボディにも触れる。

新車らしい、ひとつの傷もないそれが、普通の素材とは違うこと

を確認した。

触れたそこには”B a r g e s t”とロゴタイプされている。どうやらそれが、この車体につけられた名前らしい。

「……堤さん？」

不審げな樹里には構わず、十路はフロントに埋め込まれたメーター部分をノックしてみる。

しかし当然、なにも起こらない。

仕方がないといった顔をした十路は、車体後部横に追加されていたアタッチメント、その左側に、ずっと持っていたケースを載せると。

ガチリと音を立てて固定された。

「え……？ そのケース……？」

「なるほど……まさかこんなところで、コイツにお目にかかるとは思わなかった」

それはビジネスマンが持ち歩くアタッチェケースではなく、積載量が少ないオートバイに追加する、パニアケースと呼ばれる収納用追加パーツ。

「バーゲストって、なにから付けた名前なんだ？」

「確かイギリスの昔話に出てくる、犬の姿をした魔物だったと……」

「行儀の悪そうな犬だな……？」

これに乗るだけなら、免許は必要ないのかもしれないが、十路もそこまで道路交通法に詳しくなかった。

00 | 020 PM15::37 木次樹里（後書き）

1 ／ 1 2	1 ／ 1 0
誤字 修正	表現 修正

00 | 030 PM 15 : 49 修交館学院（前書き）

・検証…場所の实在性

とは言っても完全に同じではなく、中途ハンパにフィクションというのも自分でどうかと思うものの。

神戸は山と海に挟まれ、古くは街道の要所として、そして港町として存在していた。

それが江戸時代の終わりと共に、国際港として開かれて以来、急速に都市として栄えた。

古くから存在する日本文化と、外から入ってきた西洋文化が同居し、しかも昭和に時代が移ると、阪神工業地帯の中核として、重工業と化学工業が発展。

海を埋め立て人工島を作り、海上空港を作り、技術的な試みが行われた過去もある。

そしてそれに携わる人々のベッドタウンとしての一面も存在する。新旧取り混ぜて、さまざまな要素が混じった場所。それが神戸。

そんな土地に30年前、また新たな要素が入った。

それが《魔法》。

全世界21ヶ所のひとつ、淡路島に突如巨大な『塔』が出現したと同時に、《魔法》という未知のモノが現れた。

住人は便宜が図られ移住させられ、あらゆる交通手段が排除され、現在の淡路島は国際機関に管理されて、人の出入りは容易にできない。

世界的にも珍しい、《魔法》の発生源に一番近い主要都市である神戸が、《魔法》の研究都市として発展し、さまざまな分野の企業や研究機関がそれを解明・利用するために、この地に集まっている。

「……こういう観光案内の説明はいりませんか？」

高台にある新神戸駅から坂道を下るオートバイ。そのリアシート

に座る樹里が、運転する十路に問いかける。

十路のものはフルフェイス、樹里のものはジェットタイプ（十スポートスゴーグル）、2人のヘルメットには小型の無線機が仕込まれているため、走行中のエンジン音の中でも会話できる。

人懐こそうな印象を裏切らず、樹里は初対面の十路にもあれこれ話しかける。

「その辺はなんとなしには知ってる」

「『塔』に関しては、どこの小学校でも習うことですしね」

「それより木次さん……制服のままで2人乗^{きすき}りするの、どうかと思う」

「や、着替えないですし……」

樹里の着ている制服は、膝上10cmほどのミニスカート。60km/hの走行で、裾がパタパタ音を立ててはためいているので、十路としてはやはり心配になる。

しかし、免許はなくて運転もできなくてもオートバイ自体には慣れているのか、樹里はスカートを片手で押さえながらも、危なげなくリアシートに収まっている。

「せめてブルマー履いてくれ」

「ウチの指定体操服はハーフパンツです」

「じゃあ、それでいいから履くべきだと思う」

「や……スカートの下から出ると、カッコ悪そうで……」

「ファッションとパンツ全開になるの、どっちがマシ？」

「それならファッション優先です。スカートを押さえれば問題ないわけです」

「最近の女子高生は嘆^{なげ}かわしい……」

「堤^{つみ}さんって、結構お固い人なんですな……」

「まあ、昨日までお固い学校にいたからな」

「どちらの学校ですか？」

「……機会があったら話す」

街の案内も含んでいるのか、樹里の指示で神戸市の中心道路、国道線2号線を走る。

あつと言う間に通り過ぎる光景に、異質なものが目に付く。銀行の前には、見ればすぐわかるパトカーだけでなく、警察車両が数台停まり、封鎖線を作っていた。

「銀行強盗でもあったような雰囲気だな……？」

「全国ニュースになってたと思うんですけど」

「今日はずっとドタバタしてるし、ニュースも新聞も見えてないんだ」

ニュースの内容か、簡単に樹里が説明する。

事件が起こったのは今朝5時前、シャッターや監視カメラと共に、店舗内のATM15台が破壊され、現金約1億7000万円が盗まれる。

ATMは不正にこじ開けられると、現金に薬液を噴射して汚染させる機能があるが、これが起動しておらず、また犯行時間は監視カメラが壊されてから、警備員が到着する15分以内に犯人は逃走している。

警察によると、現場近くから黒い車が逃走するのが目撃されていて、その行方を追っている。

「……その事件、ちょっと異常だろ？」

「はい、だから全国ニュースになったんです」

「《魔法》の研究都市っての関係あるのか？」

「や、今のところはなんとも……あ、そこ左折です」

不審には思っても、事件に直接関わることのない立場の2人。世

間の一般人の多くが抱く感想以上のものは持てず、十路は指示通りに運転する。

やがて坂道を登って行くと、山の中腹、六甲山のふもととも言える土地に、団地のように詰め込まれた建物群が見えた。

学校法人修交館^{しゅうこうかん}学院。

国内外問わず、世界で活躍できる優秀な人材の育成を謳^{うた}い、幼稚園から大学までそろえた、今時では珍しい複合校。

その高等部の駐車場に、2人乗りのオートバイが駐車された。



「まだ新しい学校なんだな……」

「はい、築5年ほどですよ」

土地が土地だからか、どこかしら研究施設を連想する近代的な校舎を、樹里の案内で進んでいく。

教室はガラス張りで、廊下から簡単に授業の様子を見学することができる。

板書されてる内容から察するに、物理、現代国語、数学など、ごく普通の高等学校の内容で授業が行われている。

その中で目につくのは――

「留学生が多いな？」

自然なブラウンやレッドシユの髪を持つ生徒が、大抵どの教室にもいる。中には宗教上の理由か、民族衣装を身につけて席についている生徒も。

「海外からこの街に異動で、ご家族でいらっしゃる人も珍しくないですから、留学生さんが多いんです」

選択授業なのか、特別クラスなのか、留学生ばかりを集めて、日本語の授業をしている教室の前も通った。

「だから授業のスタイルも、他の学校とはちょっと違うと思います」
「英語圏の留学生に、英語の授業しても仕方ないだろうしな」

特別教室も案内され、実験室や音楽室、情報処理室や調理実習室など、どこの学校でもある、しかし新しい設備が入った教室も見学した。

校舎から見下ろすグラウンドでは、神戸の市街地と海をバックに、体育の授業でサッカーが行われている。

「堤さん、ウチの学校、どうですか？」

「まあ、普通の学校？」

「あはは……どんな学校を想像されてたんですか……」

「《魔法》の研究都市にある学校なんだから、変な授業とか、設備があるのかと」

「や、ここにいるのは普通の人ですし、《魔法使い》は専門の学校に通うのが普通なんですから――」

苦笑と共に答えた樹里が、なにか気づいたようにハッとし、言葉を切った。

「ごめんなさい……堤さんは、事情があったんでしたね」

「聞いているのか？」

「詳しくは知りませんが、《魔法使い》だとは聞いてます」

昇降口を抜け、外に出る。

そしてそのまま別の建物に向かう樹里に、十路は大人しくついて

いく。

「珍しくないわけ？」

「なにがですか？」

「いや、俺は《魔法使い》だし」

数千万分の一の確率でしか発生しない人間。

《魔法使い》が集められる育成校にいた時は別として、素性が知られると過敏な反応が返ってくるのが十路の常だったが。

「いいえ？」

しかし樹里は、あっさり否定。

「こんな街ですから、何人か《魔法使い》がいますから、そこまで珍しいってわけでもないですから」

「学生に？」

「はい。それに――」

そして樹里は笑顔を浮かべた。

「私も《魔法使い》ですから」

「え？」

それには十路も驚きの声を上げる。

彼女からは、そういう『匂い』が全くしない。

「ここでは《魔法使い》も、普通の生活をしてるんですよ」

「……普通の生活って？」

「や、ごくフツ―の生活ですけど？ 普通に学校来て、普通に勉強

して、普通にご飯食べて、普通に友達と遊んで、普通に生活してま
すけど？」

それは十路の常識にはない環境。

《魔法使い》の生活は、国家的な保護と引き換えに、様々な制限
がある。

おおよその進路は決まっており、公務員という選択肢以外を選ぶ
自由はあまりない。海外旅行はビザが取れない場合もある。

十路個人の場合だと、完全寮制の育成校に通っていたため、もつ
と厳しく、外泊は基本的に不許可、敷地の外へ出る場合でも事前許
可が必要で、帰った後にいつどこで誰と会い何をしたか学校へ報告
する義務もあった。

「……どうして、こんな学校に俺が招致されたのか、理由がわから
ないんだよな……」

「……？」

怪訝な顔をした樹里がひとつの建物に案内した。

高等部の敷地を出て、大学部の敷地へと続く階段を昇ったその先、
学校法人全体を管理している管理棟。

その一室、『理事長室』とプレートがかかった扉の前で止まった。

「多分、堤さんを招致したご本人に訊いてみるのが、一番だと思い
ますけど」

「そうだな」

そして分厚い扉をノックした。

00 | 040 PM 16:15 長久手つばめ（前書き）

伏線というか、ごまかしというか。
これちゃんと理解してもらえる文章になってるのか不安ですが。

「いやー！ よく来てくれたねー！」

重厚なオーク材を使った机の席に座る、この理事長室の主は、30歳に届くかどうかのスーツを着た女性だった。

「改めてはじめまして。修交館学院理事長、長久手^{ながくて}つばめです。ちなみに29歳独身」

「はあ……はじめまして、堤十路です」

「うん、知ってる」

「そりゃそうでしょうね」

言葉だけ聞けば、とりあえずちゃんとした会話をしているのだが、実際は違う。

「つばめ先生……いい加減、ゲームはやめてください」

「あゝー！ー！！」

この部屋に入って、なぜかエプロンをつけた樹里が、会話中もいじっていたスマートフォンを、つばめの手から取りあげた。

「がえゝじでー！ー！！ おゝがー！ーざー！ーん！！」

「誰がお母さんですか！ あとまたゲームで課金しまくらないでください！ 電話代6ケタに突入したらケータイ取り上げるって言うたでしょう！」

「うぐ……！！」

「いまお茶淹れますから、ちゃんと堤さんに説明してください」

「おやつは？」

「帰りがけにカステラ巻き買ってきました」

「わーい☆」

「おやつの中には早いですから、ひとつだけですよ」

「えー……」

一介の生徒が学校最高責任者に、説教して、世話している。
その姿、さながらお母さん。

「あの、木次^{きすぎ}、さん……？」

「ツツコミはなしでお願いします……」

「……了解」

そういう性格に見えない樹里が目上の相手に怒鳴り、やたらプラ
イベートな会話をし、部屋の隅のティーセットでお茶を入れるのに
慣れているのを詮索しようとしたが、先じて封じられた。

どうやら彼女にとって不本意なのが、顔色を見てうかがえた。

「それで、長久^{ながくて}手理事長……どうして俺をこの学校に招致したんで
すか？」

応接セットに移動して口火を切ると、樹里が淹れたお茶が前に置
かれた。

「んー、なにから説明しようかな」

「じゃあ、3つだけ質問しますから、イエスカノーで答えてくださ
い」

エプロンをつけたまま、樹里もつばめの隣の席に座る。普通なら
いち学生と一緒に話を聞くものではないが、それをつばめは止めは
しない。

「俺が《魔法使い》なのと関係がありますか？」

「イエスだね」

「俺が通っていた学校と、なにか話し合いがありましたか？」

「それもイエス」

「俺になにかさせようとしていますか？」

「一応だけど、イエスだね」

「そうですか」

それだけ聞けば十分とばかりに、十路が席から立ち上がった。

「え？ 堤さん？」

「それでは俺はこれで失礼します」

驚く樹里は無視し、軽く一礼し、十路はそのまま部屋を出ようとしたが。

「別にいいけど、これからどうするの？」

つばめの言葉で、扉のノブに手をかけたところで、動きが止まった。

「《魔法使い》は色々大変だよ？」

「……………」

十路が振りかえると、つばめはこちらを見ないまま、涼しい顔でお茶を飲んでいた。

「トージくんが《魔法》の使えない、出来損ないであってもね」
「え…………？」

樹里が驚きの声を上げ、十路の顔を見てくる。

《魔法》の使えない《魔法使い》なんて、聞いたことがないから。

「堤さん。《魔法》が使えないって、本当なんですか？」

「まあ……な」

「つばめ先生。まさかとは思いますが、部活のこと、全然お話ししてないんですか？」

「まあね」

「やっぱり……なにか変だと思ったら……」

つばめは素知らぬ顔で、お茶請けの菓子をほうばり始める。

「部活って、なんのことですか？」

「ふおれがキミをこのガッコーにしようひしたリユーらよ」

手でソファに指し示され、座るよう促されたが、口の中に菓子が入ったままでなにを言ったかわからなかったので、十路は視線で樹里に続きを促す。

「……つばめ先生が顧問で、私も部員なんですけど、この学院には、特殊な部活動があるんです。堤さんがこの学校に招致されたのは、その部活に入部する事が条件だと思います」

「どういう部活？」

「《魔法使い》として、誰かの願いを叶える……という部活です」

「……………は？」

馬鹿げている。

「願いを叶えるって……？」

「だって《魔法使い》は、誰かの願いを叶えるのが本業じゃないですか」

物語に描かれる『魔法使い』は、確かにそういう役割の者がいる。しかし現代社会に生きる《魔法使い》は、そんな存在ではない。

「大体、そんな簡単に《魔法》が使えるはずないだろ？」

「ここは実験都市ですから、普通の人と《魔法》の関わりの検証実験という名目で、特例として許されてるんです……まあ、かなりの裏技ですけど」

「『杖』は？」

「それも特例で、私たちは自分専用のものを持ってるんです」

存在自体は周知のものとはいえ、一般人が《魔法》と携わることは普通ありえない。

しかしどうやら冗談ではなく、樹里の言葉は本当であることを理解して、十路は絶句する。

その方法はなくはない。《魔法使い》ではない普通の人間たちが作った決まりの中で、不可能ではないと、十路も理解はできる。だが、普通はそんなことを実行しようと考える人間はいない。

「……部の名前は？」

「……都市防衛部といいます」

「……とりあえず3つ、ツツコミたい」

「想像できる第1のツツコミに返すと、この名前をつけたのは、つばめ先生です……」

中二臭の漂うセンスはこの人か、と菓子をほうばるつばめを横目で見る。

「第2に、要はなんでも屋です……」

過激なチーム名でも活動内容は町内探検だったりする、小学生レベルのセンスだと認識を改めた。

「第3に、名前だけでなく、内容にもあまり《魔法》要素はありません……」

最近はサンタクロースを信じない、夢のない幼稚園児も増えてるらしい、と、センス以前の現実を考えさせられてしまう。

そして樹里がツツコミを的確に予想したわけではなく、同じことを誰もが訊くのだらうと思うと、複雑な気持ちになる。

「入部した感想は……？」

「あはは……一言で表すと、人生の転換期ですね……」

「悪かった。訊いてはいけないうことを訊いてしまったらしいな……」

しかし、目を泳がせる樹里を見る限り、後悔はしているようだが、退部する意思は感じられない。

そうなると考えられるのは、樹里も十路同様に、交換条件の義務として入部しているか、それとも不利益以上の利益があるかのどちらか。

口の中を茶で洗い流し、つばめが会話に加わる。

「……どう？ 転入して、入部してくれない？ ここでの生活の一切を、こっちで面倒見るし、途中で辞めるのも自由だから、悪い条件じゃないと思うけど？」

部の名前や活動内容はともかく、ただの条件と捉えれば、破格の

好条件。

しかし、ただの交換条件だと理解している。

「そっちのメリットは……？」

だから、どんな無理を吹っかけられるか、十路は警戒する。

「ぶっちゃけ、人数が足りなくて廃部の危機」

「は？」

「5人以上の部員が必要なんだけど、防衛部は、ジュリちゃんともう1人しか部員がいらないんだよね」

「この学校の最高責任者はあなたですよね？　それで、理事長が顧問ですよね？　なのに廃部の危機？」

「組織のトップが率先して決まり破っちゃいけないでしょお？」

「……ビミョーに恥ずかしい名前変えたら、入部希望者来るんじゃないです？」

「それはイヤ」

「だったらムリでしょうね……」

嘘をついていると考えるほどではないが、交換条件が余りにも小さいものだから、つばめが口にしていない事情があると疑う。

この招致の話はあまりにも怪しすぎる。

しかし――

「入部すれば、トージくんの望みも、叶うかもしれない」

「俺は、出来損ないの《魔法使い》ですよ？」

「それでも、だよ」

「……………」

つばめの言葉に、十路の心が揺れ動いた。

それが絶対に叶うはずのない願いでも。
つばめの笑みが悪魔のそれに見えても。

00 | 040 PM 16:15 長久手つばめ（後書き）

1 / 9 修正

00 | 050 PM 16 : 32 都市防衛部（前書き）

ほぼ設定説明です。

チャイムが鳴り響き、校舎から生徒たちが出てくる。

理事長室で『荷物』を受け取った樹里を追いかけて、私服姿で十路がオートバイを押しながら歩くと、その中では浮いているが、一瞥される以上は注目されない。

放課後の学生たちは忙しく、学外の人間が敷地内にいても、不審人物扱いされるほどでもないのだろうか。

樹里が長くて奇妙な棒を持ち歩いていても、特別注目されているわけではない。

「ここがウチの部室です」

連れてこられたのは、高等部の校舎の裏手。外からぐるっと回らないと来れない、平屋の建物。

電動シャッターのスイッチを入れ、上がりきるのを待たずに入る樹里が、十路を中へと誘う。

「ガレージのくせに、えらく生活感に溢れてるな……」

「やー……つばめ先生いわく、部室棟に空気がなくて、融通できるのはここだけだったそうで……」

元はマイクロバスのガレージだったのか、普通車が縦に2台は置けるスペースに、パソコンが乗ったスチールデスク、ソファセットにティーテーブルに冷蔵庫。粗大ゴミ置き場から拾ってきたような古びた家具が置かれている。

壁は本棚とラックで埋め尽くされ、背表紙からして難しそうな内容の本はあるが、ほとんどはマンガや小説、ゲームのパッケージや

映画のDVDといった娯楽品。あとは中身の知らないダンボール箱。このスペースを見る限り、《魔法使い》とは一見無縁。最近の子供はそういうものを作らないかもしれないが、秘密基地を連想する空間を、彼女は部室と呼んだ。

「でも、新しくオートバイを備品として用意したってことは、元々ここしか使わせないつもりだったのかもしれませんがね」

持っていた長い棒を、無造作に壁に立てかけた樹里が、隅の冷蔵庫から麦茶をコップ2つに入れる。

「前々から備品として予定されてたんじゃないのか？」

空きスペースにオートバイを駐車させ、十路はガレージ内を歩きまわり、ダンボール箱を軽く叩いて中の感触を調べる。

「そのバイク、お昼までありませんでしたから、堤さん用に用意したものだと思うんです」

「なんとまあ……転入も入部も未確定なのに、そこまで前もって……」

「つばめ先生、それだけ堤さんが入部することに、期待してるってことじゃないです？」

「いや、違う。初期投資をあからさまにして、俺が断りにくいようにしてる。要するにハメようとしてるだけ」

「あはは……確かに計算高い面はありますが、信用できる人ですよ」

「悪いけど、俺は初対面だから、木次さんほど信用できない」

結局、転入の話は保留した。

全寮制の学校を退学させられて、今夜の寝る場所もない十路にと

つては、魅力的な話ではあるが、信用するには危機を感じる。
だから部員である樹里から、もう少し話を聞きたく、場所を移す
ことになった。

「その部活、ヤバいんじゃないのか？」

「やー……基本的には、理事長室でお話した通り、なんでも屋さん
ですよ？」

「《魔法使い》が願いを叶える……それだけ聞くと、正にファンタ
ジーだな」

手でソファにどうぞ示す樹里に、片手を上げて感謝を伝えるが、
なぜか座らずソファのクッションを上げて下を調べる。

「だけど《魔法》を使えない《魔法使い》は、お呼びじゃないだろ」
「や、使えないよりは使えた方がいいですけど、重要なのは、そこ
じゃないんです」
「違う？」

這いつくばるように家具の裏側を覗きこんでいた十路が、驚きの
目で樹里に振り返る。

「大事なのは、自分が叶えたい望みがあるかどうかで、部員は《魔
法》の使えない普通の人でもいいんですよ」

「自分の叶えたい願い……」

堤十路には、それがある。

「木次さんにも、それがあるから入部したのか？」

「そうですね……内容は訊かないでくださいね？　部則で禁止さ
れてますから」

「規則がちゃんとあるんだ？」

「『《魔法》を悪用しない』『自主性に責任を持つ』『部員の事情を詮索しない』『学生らしくあれ』」

「……は？ それだけ？ たった4つ？」

「はい、それだけです」

「……？」

最初は理解できる。

《魔法》という能力を、犯罪という短絡的な方法に使わないために、最低限の戒めは必要。

問題は残りの3つ。

《魔法使い》なんて得体の知れない人間を詮索しないことはありえないし、《魔法》という異能を持つ人種には義務が生じ、『自主性』という言葉は無縁なことが多い。

そして学生相手に、わざわざ『学生らしく』なんて改めて言うことでもない。

加えて、貴重な人的財産である《魔法使い》は、保護の名目でなにかと制限が多い人種。

重要なことを口頭だけで注意、しかも破った場合の罰則を定めていないなど、普通はありえない。

「私も、もう1人の部員も、自分の望みを叶えるために、この部活に入部してます。ですけどお互い、その内容を詳しくは知りません」

「『事情を詮索しない』って項目か」

「どちらかと言えば『自主性に責任を持つ』の方ですね。人の心に踏み込む責任は、私じゃ取れないかもしれませんから」

「なるほど……」

「堤さんの望みだって、気軽に訊かれてもイヤでしょう？」

「……いや、俺のは簡単」

膝をコンクリートの地面についたので、ジーンズを払いながら、なんでもない調子で答える。

「俺の望みは、普通に生きること」

「……はい？」

「とりあえず、退学させられて、衣食住を欠く状況なので、普通に生活できる程度はなんとかしないと」

「あのー……差し出がましいですけど、つばめ先生の話を了承すれば、それって叶うんじゃない？……」

「ん、まあ、そうなんだけど……」

転入と入部の条件は、話が美味すぎて怪しい。加えて、やはり躊躇してしまう理由がある。

十路の望みが『普通に生きる』ということは、これまでは普通に生きていないということだから。

「ところで……さっきからなにしてるんですか？」

「大したことじゃないから、気にしないでくれ」

「や、気になるんですけど……」

十路はずっとなにかを落し物を探すように、家具の隙間にも手を入れて探っていた。

物を動かすのは遠慮したようだが、床から天井まで、目が届く範囲は全て調べようとしている。

「さすがに見ただけでわかるような物はないか……どうだい？ なにか変な電波出てないかー？」

「はい？ 電波？」

「ああ、違う。木次さんに言ったんじゃない」
「？」

この部屋には、人間は2人しかしかいないのだから、樹里を否定すれば、返事をする者はいない。

しかし反応がないのが否定の反応と、十路は判断した。

（盗聴器や隠しカメラの類はないのか……意外だな）

拍子抜けした顔をして、十路は改めて、部屋の隅に視線をやる。

「で、俺も訊きたいんだけど、木次さんの『杖』、あんな風に扱ってていいのか？」

理事長室で樹里がつばめから受け取り、部室の壁に立てかけてある物を指差す

長さは2mほどの長大なもので、電子部品のような無骨な先端を持つ、一見子供の自由な発想で作られたガラクタにも見える棒。女の子の持ち物らしく、先端部近くの柄に小さなヌイグルミやストラップがつけられ、それに混じって『防衛部備品 E－W－S』という文字と、管理番号と思われる数字が書かれているプラスチックカードがぶら下がっている。

『杖』と呼ぶには長すぎるが、それでも十路はそれを『杖』と呼んだ。

「や、アビスツールの扱い、いつもあんな感じですよ？」

それは現代社会に生きる《魔法使い》が必須とする『魔法使いの杖』だから。

「念のために訊くけど、《魔法使いの杖》^{アビスツール}の値段、知ってるのか？」
「やゝ、実は具体的には知らなくて……」

「標準的なものなら飛行機が買える」

「……………セスナ機ですか？」

「ジャンボ機。参考までに、政府専用機の価格は180億円くらい。最新鋭旅客機だともっと高い」

「え。」

「本当に知らないんだな……………」

「や、だって防衛部に入部した時、『これ使え』って、普通に渡されたので……………」

「ゲームでは考えられない超高額初期装備……………」

「これからは大事に扱います……………」

「というか、『魔法使い』なら知っていような？」

「はい……………」

怒られた犬のように、しょんぼりして長杖を抱える樹里に、十路は改めて疑問を覚える。

（この娘、本当に『魔法使い』か……………？）

自ら『魔法使い』だと名乗った時から、疑問に思っていたが、それらしくない。

十路が知る『魔法使い』たちは、ある意味では純粹であったが、目の前の女子高生のような、どこか抜けている純粹さではなかった。

「嚴重管理してるんだろうな？」

「します！ いつもはつばめ先生がちゃんと管理してる……………はずです……………多分……………」

「オイ……………」

「や、普段どこでどう管理してるのか、知らなくて……………」

理事長室で手渡されたのだから、管理は顧問のつばめがしている

のだろうが、エーカゲンな性格がうかがえる理事長に、樹里も十路も不安になる。

《魔法使い》が《魔法》を使うのは、現代社会では大きな制限がかけられており、普段の管理も猟銃などとは比べ物にならない厳重さを、法律で定められている。

だから、十路は思ってしまう。

（大丈夫か、この部活……？）

入部した途端、国家権力が絡むような、とんでもない厄介に巻き込まれそうな予感。

00 | 050 PM16 :: 32 都市防衛部(後書き)

1 / 5 脱字修正

1 / 10 表現修正

00 | 055 PM 16 :: 33 インターミッション02 (前書き)

今回はちゃんとインターミッション。
シリーズ成分挿入？

「探したぞ……」

神戸市郊外、今は事務所も店舗も入っていない、荒れた雑居ビルの一室。

中身が入った麻袋が2つ、部屋が転がって以外、部屋の中にはなにもない。

「面倒を起こしてくれたな……?」

黒ずくめの男が、気だるげに日本語で語りかける。

黒いライダースーツに、濃い色の入ったシールドのフルフェイスヘルメット。日中でこの格好はかなり怪しいが、人目は目の前の男以外にいないので問題ない。

身長は170cmを少し超えたところ、声の雰囲気からすると若い男、体にフィットしたスーツのラインから、それなりに鍛えているのはわかるが、それ以上の情報は得られない。

「どーゆーつもりだ、アイマン」

「……放ってオイてくだサイ」

『アイマン』と呼ばれた相手の男は、まだ10代半ばと思えるアジア系の顔立ち。服装には変哲なく、浅黒い肌は、175cmほどの筋肉質な体と相まって、日本人ボディビルダーと言えば通用しそうだが、なにより言葉のイントネーションが明らかに違う。

彼は奇妙な荷物を持っている。

金属の塊。1mを超える棒状のものだとはわかるが、火事場から拾ったように破損がひどく、元の形状が想像できない。

そんなガラクタにしか見えないものを、アイマンは大事そうに抱えていた。

「アナタ、私と、もう関係ナイ」

「まあそうだな。俺もお前も使いっぱしりだし、大事なことは知らされていないから、お前がなにをしようと、関係性を疑われることはないだろう」

黒ずくめの男が、グローブに包まれた手で、首筋をポリポリとかく。『困ったな』とでも言うように。

「だけど状況は把握しておきたいんでな。後で痛い目みたくないから、俺は平和な時間を割いて、お前を探してたんだ」

「……修理します」

アイマンは抱えた金属の塊を示す。

「ああ、お前を解雇^{クビ}する時に、ぶっ壊しちまったヤツか」

黒い男としては挑発のつもりはなく、ただの事実確認で言っただけだが、その一言でアイマンの目付きが変わり、手にした金属の塊を男に向けた。

人を射殺せそうな視線だが、それを受けても態度は変わらない。

「よせよせ。お前じゃ俺を殺^やれねえから」

「——っ」

その言葉は真実なのだろう、眼光は弱まりはしないが、悔しそうにアイマンは小さく舌打ちする。

「で、なにする気だ？ 『それ』を新しく手に入れようにも、お前が盗んだ金額じゃ、とても足りないぞ」

「……コの人に頼みマス」

ズボンのポケットから、アイマンは写真を取り出して見せる。

写っているのは、見目麗しい金髪碧眼の女性。日本人の感覚なら、年齢は20歳を超えている。穏やかな微笑みを浮かべ、しかし凛とした空気を放っている。隠し撮りされたものではなく、被写体の女性性はカメラを向けることに慣れてるらしい、視線を向けている。

それを見て黒い男は、ヘルメットの中で人知れず顔をしかめた。

「今、トウキョウにいるケド、今日帰ルと聞きマシタ」

「……その女は、確かにそいつを修理できる腕を持っている。けど、止めた方がいい」

「アナタ、ジャマしまスカ？」

「……そのつもりだったが、やめた。どうやらお前は知らないらしいからな」

「……？ どういうコトデスカ？」

「そこまでは教えてやる義理はない」

黒い男が冷たく拒否した時、外が賑やかになる気配が室内に届いた。

「仲間か？」

「ハイ、手伝ってモらいマス」

部屋の扉が開かれて、談笑しながら入ってきたのは、アイマンと同郷と思える者たち11人。その多くはアイマンと変わらない年頃。緩んだ空気が黒い男を見た途端、一瞬で緊張して、荒くれ物のもに変わる。

しかし、アイマンが知らぬ言語で声をかけると、警戒を残しつつも、とりあえず納得はしたらしい。敵対しようとするのは止めた。そしてアイマンは、部屋の隅に置かれていたズタ袋を男たちの前に放りだした。

重そうなその中身を見て、男たちが口笛を吹いて狂喜する。ただ1人だけ、大人しくその様子を眺めている例外もいるが。

「――グラム」

どうやらそれが1人醒めた男の名前らしい。歳は他の者よりもやや年嵩で落ち着いた様子を見せ、軽くアイマンを見た以上の反応を見せず、壁際に背中を預けて待機する。

大人しいグラム、口々に歓声を上げている多数の若者、それを眺めるアイマン。

その対比をヘルメットの男は眺め、小さくため息をつく。

（盗んだ金を12人で頭割りしても、連中の国なら10年やそこらは平気で遊べるだろうからな……）

部屋の隅に置かれた、もうひとつの麻袋の中身を推測。

（どこのヤツから仕入れたのか知らないが、あの程度の銃火器なら、オモチャ高くても2000万もあれば揃うだろうし……）

しかし、と黒い男はヘルメットの中で思う。

（どうやってそれだけの大金を換金する気だ？ マトモな手段じゃ疑われるだろ……）

裏社会の人間として生きるには、アイマンは知らないことが多い

ぎる。

これも忠告する気はない。やはり解雇されるべき人間であったと、黒い男は改めて納得した。

「アイマン、様子は見させてもらうが、止めはしない。俺たちにまで厄介が及ぶようなら、しゃしゃり出るが、この調子だとそうならないだろう」

騒いでいた男たちが一斉に目を向けてくる。

しかしそれに構わず黒い男は、部屋の出口へ歩く。

「じゃあな」

「オ世話になりマシタ」

言葉を交わして、黒ずくめの男はビルを出た。

00 | 055 PM 16 :: 33 インターミッション02 (後書き)

1 / 8 修正、文章追記

00 | 060 PM 16:45 防衛部の活動（前書き）

中途半端な日常会話。

日常会話を強めた方がいいのか、あるいはバツサリ切り捨てるかした方がいいような気はしないでもないが、試験的にこれで投稿。

都市防衛部の部室には、意外と来客が多い。
それが堤^{つみ}十路^{とおじ}の感想。



最初に来たのは、30代と思える男性。

「――最近、妻が冷たいんだ……」

「あのー……先生？ それは私に言われても困るんですけど……」

高等部の教員だった。

「『魔法』でなんとかできないか？」

「や、そんなのムリですから、ご夫婦で話し合うのが一番かと……」
「教師の仕事って忙しいんだ……」

「はあ……」

「毎日帰りは遅いし、部活の顧問やってると土日も休めないし……」
「はあ……」

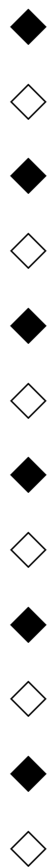
「それを承知で結婚してくれたと思ったのに……」

「や、そうだとっても、やっぱりガマンの限界があると思うんです
……」

飲み屋でのグチを連想する空気に、視線で十路に助けを求めてくる樹里。

こんな悩み（しかも立派な大人の）にアドバイスできるほど、十路も人生経験豊富ではないが、樹里の意見と合わせて『花束でも持

って早く帰って一緒に食事しろ』という結論に至った。



次に来たのは、高等部の男子学生。

「樹里ちゃん」

「すみません先輩、今日はここに居座らないでください」
「冷たいっ!?!」

樹里から『先輩』ならば上級生だが、どうやら顔見知りらしい。

「や、今日は案内中なので、困るんです」

「どーも。案内受けてる人間です」

「……………」

軽く挨拶すると、その男子学生は十路の顔をじっと見る。

「……………なんですか?」

「お前とは、なぜか気が合いそうだ」

「…………前世でお会いしましたか?」

「違う。そういう意味じゃない」

「だったら?」

「今、ロシア美女が熱いと思いますか?」

「いや……………特には」

「…………やはりお前とは仲良くできそうだ」

「意味わかんね……………」

「また会おう! アデュー!」

一見するとモテそうな男子学生、謎のイイ笑顔を残し、遠ざかる。

その背中を指差し、十路は樹里にゆっくりと振り返る。

「……バカ？」

「……………」

樹里は否定しなかった。



3番目に来たのは、高等部の女子学生。それほど親しいわけではなさそうだが、どうやら樹里の同級生らしい。

「水野さん、どうしました？」

「ええと……木次さんきすきだけ？」

「あ、部長は今日いないんです。私でよければご相談に乗りますけど？」

「でしたら、お願いしたいですけど……」

その女子学生は、気まずげに十路を見てくる。

「……あ。俺、席を外しとくから」

「すみません、堤さん」

どうやら十路がいたら話せないらしいと気づき、部室の外に出て離れて様子を窺う。

水野と呼ばれた女子学生本人は、深刻そうに話しているが、樹里は微笑して、ときおり頷いているから、実際はそこまでないのだろう。恋愛相談やその他の『女の子の悩み』だと、十路は推測した。

「頑張ってください！」

「はい……」

内容はわからないが、意外と短時間で終了。どうやら樹里でも大丈夫だったらしい。



ちなみに、客が来ない間はと言うと。

⋮

樹里は高校生らしく、部室に置きっぱなしのティーンズ雑誌を読み始めた。

$$\vdots$$

仕方ないので十路も、本棚に詰めてあるマンガを手にとって読み始める。

⋮

⋮

$$\vdots$$

⋮

部室の中に流れる、なんとも言えない時間。ページをめくる音と、遠くから聞こえてくる運動部の掛け声だけが届く。

樹里はあまり気にしてない。十路はなんとなく気まずい。

「あ、堤さん、麦茶おかわり淹れましょうか？」

「ああ……頼む……」

冷蔵庫を開け、麦茶を注ぐ音が新たに響く。
そしてソファに座る十路の前に、コップが置かれる。

「どうぞ」

「さんきゅ」

「……………」

「……………」

そしてまた、お互い無言でページをめくる。

「……………なあ、木次^{きすき}さん」

「はい？」

「会話のない家庭に育ったのか？ 両親の夫婦仲、倦怠期だったのを目の当たりにしたのか？」

「……………はい？」

「いや、なんでもない……………」



理事長室で話を聞いて、予想をしていたつもりだが、それ以上に
ショボイ内容。

「ここはカウンセリングルームか休憩室？」

「……………否定できませんね。いろんな相談を持ちかけられますし」

「しかしまあ、よく部外者が来るな？」

内容にもよるだろうが、相談事なんて普通、よほど親しい間柄で
ないといけない。

「木次さんは人望あるんだな」

「いえいえ、人望があるのはこの部の部長で、私はそのオマケです」
「ふん？」

たった2人の防衛部員。樹里を除く残るもう1人。
話の合間にたびたび出てくるが、どんな人物像なのかは、全く出てこない。

「どんな人？」

「……一言で説明するのは難しい人ですね」

「まあ、俺の経験上、《魔法使い》は奇人変人が多いしな」

十路の脳裏に、よくある偏屈そうな老人の魔法使いが思い浮かぶ。
部員なら学生だろうから、その想像が変だとは理解しているのだが、テンプレートとして。

「誤解されないように言っておきますけど、いい人ですよ？ 取っ付きにくいところありますけど、誰にでも親切で面倒見いい人ですから、こうして相談事が持ちかけられるんです」
「ふん？」

どうも樹里はお人好しな印象があるので、十路は話半分で受け取っておく。

都市防衛部——《魔法使い》のいる部の代表が、とても普通の人間だとは思えない。樹里のようなタイプの方が《魔法使い》には珍しい。

「私の口からお話しても、多分上手く伝えられないので、実際に会ってお話するのが一番だと思います」

「その部長は？」

「用事があるらしくて、今日は部室に来れないと思います」

ならば話せないし、しかも転入を断ったら会う機会も今度ないだろう。

十路は軽く肩をすくめて、その話を終わらせた時。

「ねーちゃん！」

小学生だろう、元気の良さそうな男の子が、息せき切って部室に飛び込んできた。

「来て！」

「どうしたの？」

「イオリがジャングルジムから落ちた！」

言葉足らずな会話だが、それで通じたらしい。

顔つきを改めて立ち上がり、樹里は壁に立てかけた《魔法使いの杖^ル》を手にする。

「どこ!？」

「校庭！」

それだけ聞いて、樹里は外に駆け出した。

「あ、おい！」

止める間も、詳しく聞く間もなかったので、十路も樹里を追い、高等部校舎の裏を全力疾走。

00 | 070 PM 17 : 21 修交館学院初等部にて(前書き)

またも伏線投入。

いつ回収することになるのやら。

00 | 070 PM 17:21 修交館学院初等部にて

1分後には2人とも、初等部のグラウンドに到着。

高等部の校庭とは違い、設置されている遊具、そのジャングルジムの近くに子供たちが数人、固まっている。

「どいて！」

どうすればいいかわからず、心配そうに見下ろす子供たちの輪を割り、その中心、地面に倒れて泣き叫ぶ女の子の側に樹里が膝をつく。

「木次^{きすき}！ 動かすな！」

2秒ほど遅れて十路も近づく。

「折れてる……」

「左腕からジャングルジムを落ちたんだろう。頭を打ってるかもしれない」

「回路展開」

樹里が手にした《魔法使いの杖^{アビスツール}》の先端が一瞬だけ発光。

少女の全身を取り囲むように、そして左の二の腕、関節がないのに曲がっている位置に、腕を取り囲むように光る幾何学模様を形作られる。

EC—Sircuit。現代の魔法を行使する際に現れる『魔法陣』で診察。

「頭は……大丈夫。単純骨折だね。キレイに折れてるから、接合だ

けで十分」

ひとりごとを呟き、念じるように樹里がまぶたを閉じる。

「実行」

たった一言。

それで骨折部位を囲んでいた幾何学模様が、淡く光量を増し、不自然だった少女の左腕が元に戻る。

「医療魔法……」

初めて見るものではないが、十路は軽く驚く。

しかし、この手の魔法の使い手で、樹里のような若い者はまずいない。

人体の仕組みを理解するほどの知識、つまり医者になると変わらない勉強が必要なのだから。

「うん。完了」

満足そうに頷き、長杖を軽く振ると、幾何学模様が消え失せた。

EC-Sircuit

「ほーら、もう大丈夫だよー。それともまだ痛い？」

地面に寝たまま泣いていた少女を抱き起し、樹里が笑いかける。どうやらこういう光景は、初めてではないらしい。心配そうに見ていた周囲の子供たちは、ほっとしたように顔をほころばせるだけで、驚いた様子はない。

無造作に人前で《魔法》を使ったというのに。

それも十路には驚きというか、不思議であったが、なによりも不

思議に思っていたことに、一つの結論が出た。

「木次さんって、本当に《魔法使い》だったんだな」
「信じてなかったんですか!？」



「やゝ、大したことなくて、よかったです」

ジャングルジムから落下し、骨折した少女の治療を終え、樹里は
部室に帰って来た。

「……………」

眉根に皺を作る十路を連れて。

「あのー……堤さん？ さっきからどうしたんですか？」

「……………」

訊ねても十路は返事しない。

またも壁に立てかけた、樹里の《魔法使いアビスツールの杖》をジッと見て、
微動だしない。

「堤さん……?」

反応しない十路の背後に近付き呼びかけた、その途端。
ほんの少しの衝撃と共に、体が軽く落下した。

「え?」

「あ!？」

樹里の声の意味は疑問。十路の声の意味は後悔。

「え？ え？ え？」

自分になにが起こったのか、理解できず樹里は狼狽。理由不明で倒れかかった体、上体に回した十路の腕一本で支えられていた。

必然的に顔が体に近づき、今までは意識してなかった十路の匂いが鼻に届く。

（わっ……なんだか安心できる匂い……）

新陳代謝が活発な高校生男子の匂い、しかも夏が近づき汗が流れる梅雨の時期でも、不思議と不快な気持ちにはならない。

「……………スマン」

「や、いえ……？」

そんなこと樹里が考えてるとは当然知らず、気まずげに無理矢理立たせ、怯えたように十路が距離を取る。

「俺の不注意だ……悪いクセが出た」

「癖？」

「前の学校で身についたクセ……」

背後に立った樹里を、反射的に足払いで地面に倒し、拳か蹴りを叩きこもうとして慌てて制止した。

とりあえずは何もなかったと、ため息をついて安心し、次もまたあるかもしれないと思うと、十路は暗澹たる気持ちになる。

「誰かれ構わず抱くクセですか……？」
「俺どんな犯罪者だよ！？」

しかし何も知らないというのは、ある意味幸い。的外れな回答に、暗い気分は吹き飛んだ。

「わからなかったら、それでいい……ともかく悪かった」
「はあ……？ まあ、いいですけど……」

奇しくも同時に、2人がそれぞれに同じ評価を下した。

（堤さんって、変わった人だなあ……）
（＞木次―きすきくって、変わった娘だな……）

十路への評価はそのままの意味で。樹里への評価は抜けているという意味で。

「それで、私の《魔法使いの杖》^{アビスツール}がどうかしましたか？」
「あー……いや、いい。なんでもない。言おうかどうか迷ったけど、いま言うことでもないかと思って」
「？」

迷っていた雰囲気から、深刻な話をしたいのではないかと想像していたが、そう言われると訊き返せない樹里。

十路が考えていたのは、グラウンドで樹里が医療魔法を使った件。あんなに簡単に、人前で魔法を使うことを注意しようかとも思ったが、周囲の子供たちが驚いた様子もなかったので今更なのだろう。そして『抱きつき癖』疑惑で、真面目な話をする気分でもなくなつた。

だから話を変えた。

「あー……それでまあ？ 防衛部の活動って一通り見せてもらったってことになるのか？」

「まあ、そうですね。どうでした？」

「……そうだなあ」

活動内容はカウンセリングルーム。《魔法》を使う事があっても小さな治療程度。医療魔法は十路は使えないし、そもそも十路は《魔法》自体が使えない。

部活動としては存在理由が不明。《魔法使い》などという世界で一番面倒な人種を使うほどでもない。

こんな部活動の入部が、転入の条件にされる理由は、やはり不明。そこまではプラスマイナスゼロの様相だが、自身への問題で、大きなマイナスだと十路は思う。

無意識の行動とはいえ、樹里を傷つけようとしたのが大きな精神的ダメージ。

「転入は、やー」

「おー、いたいた。ジュリちゃん」

転入はやめよう、と宣言しようとしたが、部室につばめが入ってきたことで遮られた。

「まずコレ」

「？ なんです？ これ？」

つばめの手から渡されたのは、合金製のケース。今はオートバイの後部に積みっぱなしにしている、十路の荷物と同じ物に見える。

「ジュリちゃんのケース。今日からコレ使って」

「へ？」

「あとトージくん、お願いがあるんだけど」

「は？ 俺もですか？」

「うん。トージくん、体験入部中でしょ？」

「まあ、そうなりますけど……」

「ってことは、『部活』ですか？」

「うん。2人一緒の方が丁度よさそうだし」

樹里は部員として問題なくても、十路は現状では部外者。それになにが丁度いいのか疑問だが。

「理事長……俺になにさせる気ですか？」

十路の問いに、つばめは笑みを浮かべる。

邪悪ではないが、イタズラ心を秘めた小悪魔の笑み。

「ある人を迎えに行って欲しいの」

00 | 070 PM 17:21 修交館学院初等部にて（後書き）

実はこの文章、元のプロットから実験検証のために変えている部分があります。

なので無理矢理感があるかもしれません。

00 | 080 PM 17 :: 55 ユゼット・ドウ||シャロンジェ (前書き)

検証事項の伏線追加。

いつになったら回収するのか我ながら不明。

坂道を下り、大通りを抜け、2人乗りのオートバイが橋を渡る。
新神戸駅から修交館学院までの道のりとは少し違い、今はオート
バイの両サイドに、金属製のケースが乗せられている。

神戸市中央区港島。六甲山の土に埋め立て人作り上げた島、ポー
トアイランド。

過去には医療関係 淡路島の『塔』と《魔法》が現れた以後は《
魔法》に関わる研究施設や企業が、この場所に集結している。

もちろん普通の公共施設や住居、店舗も存在しているが、全体数
からすると、やはり企業の建物が多く、ビジネス街の様相を呈して
いる。

「迎えて、まさか俺と同じく転入生候補じゃないだろうな？」

「や、違います。用事で東京まで旅行に行ってた人のお迎えなんで
すけど……」

「^{オート}単車で？ しかも2人乗りなのにな？」

「やー……本当にお迎えするだけですね」

「なんか歯切れ悪いな？ あの理事長から話すなどとも言われたの
か？」

部室で『お願い』をして来た際、つばめは樹里に、十路には聞こ
えないように耳打ちしていた。

それを聞いた樹里は、少し戸惑った様子ではあったものの了承し
たので、十路も別段気にしていない事になっていた。

「後で堤さんを驚かせたいそうですよ」

「相手、有名人？」

「まあ、一部の人には有名人ですね」

つばめが口止めしているせいで、樹里の返答はハッキリしない。
だからこれ以上の詮索は諦めて話を変える。

「『杖』が必要ってことは、ヤバいのか？」

オートバイはそのまま直進し南下、海上道路を進む。

交通量も多少減り、ほぼ直線になったので、十路は後ろを少しだけ振り返る。

しかし言葉とは裏腹に《魔法使いの杖》——2mにもなる長杖を樹里を持たず、片手を十路のベルトを掴み、もう片方の手でスクーターを押さえている。

「そういうわけではないですけど、いざって時になにもできませんし、それに身分証明に便利ですから」

「180億円の身分証明書……やっぱり扱いがぞんざいだな」

「今日から大切に扱いますってば！」

向かう先は人工島を通り抜け、更に先にもう一つの人工島、神戸空港。

話しているうちに、オートバイは空港に到着。有料駐車場に駐車し、2人はヘルメットを脱ぎ、ターミナルビルに入る。

「で、まさか俺の時みたいに、相手に待ちぼうけ喰らわせてないだろうな？」

「ちよっと危ない時間ですね……」

「おい……」

「文句はつばめ先生に言ってくださいよお……堤さんの時も、時間過ぎてから聞いたんですし」

神戸は世界的にも珍しい地理的条件に恵まれた《魔法》の研究都市。だからこの空港には人の出入りが多い。

この中で人ひとり探すのは、かなり骨だと十路は覚悟するが。

「堤さん、こっちです」

別の方向を見ていた樹里が、十路の服を軽く引っ張って導く。どうやら簡単に見つけたらしい。

相手のその姿を見て、簡単に見つけた理由を納得する。

機内で電源を切っていたから、早速メールチェックでもしてるのか、ゲート近くの壁際でスマートフォンを操作している、ヨーロッパ系の金髪碧眼の女性。

側に小さなスーツケースを置き、女性らしい曲線を描く体を、カーディガンと白のサマードレスで覆っている姿だけで判断すれば、周囲の旅行者に紛れてしまいそう。しかし理知的な美貌と誰もが彼女に一度は振り返る空気を持っているため、人ゴミの中でも目立つ。

「あら、木次^{きすぎ}さん？」

樹里が声をかける前に、その白人女性が小さな画面から顔を上げて、近寄って来る樹里を見つけ、親しげに話しかける。

「わざわざお出迎えに来てくださいましたの？」

その口から出てくるのは、外見からは意表をつく流暢な日本語。

「はい、つばめ先生からぶ——じゃなかった、殿下をお迎えにあがるように指示されました」

「？」

なぜか『殿下』と呼ばれた女性が軽く首を傾^{かし}げ、ハニーブロンドの長い髪を揺らし、樹里の共に立つ十路に視線を移す。

「木次さん、そちらの方は？」

「堤十路さん、防衛部の体験入部をされてる方です」

「ああ、なるほど……」

女性がスマートフォンをポケットにしまい、気さくな笑顔と右手を十路に差し出す。

「初めまして。コゼットIIドウ・シャロンジェと申します」

が、十路は固まって動かない。

「……ちよつと待て、木次？ 《付与術士》^{エンチャンター}がどうして……？」

「あら？ 私のその名前を^{わたくし}ご存じですか？」

「少なくとも日本の《魔法使い》で知らなかったらモグリです……」

十路が《魔法使い》だと知って尚、過剰な反応なしに微笑む女性の正体。

立憲君主制国家、つまり王政が残るルクセンブルグ公国第3位の王位継承権を持つ、本物の王女。

そして若干20歳にして、日本における理学と工学の博士号を持つ、その分野の研究の第一人者。

親しみやすい人柄とは裏腹に、技術研究者としても、外交の相手としても、国家的な重要人物。

「堤さんがコゼット殿下をご存じなら、研究成果もご存じですよね？」

「ああ……空間圧縮技術の確立」

それは《魔法》を応用させ、密閉した空間を人為的に操作し、実際に以上に容積を増やす次世代技術。

つまりゲームでは当たり前前に存在する、いくらでもアイテムが入る魔法の入れ物を、初期段階ながら現実につけてしまった。

だから彼女は魔法の物品を作る特殊な生産能力保有者――《付与^{エンチ}ヤンター術士》と呼ばれる。

「私が行ったのは基礎技術の作成だけ。しかもまだまだ実用段階には程遠いです」

運輸業界に革命を起こす驚異的な技術だが、彼女の言葉通り、現状ではまだ問題が多いため、その技術は市民生活までは広まっていない。

そのため彼女は、科学技術分野ではかなりの有名人ではあるが、一般人は知らないであろう。もし知られていたとしても、それは『美人の王女様』という肩書きの方。

「それから、どうやら貴方は、木次^{きすき}さんと私の関係に驚いているようですね？」

「ええ、まあ……」

「修交館学院のご協力があったてできた研究ですし、現在も都市防衛部で継続実験を行っていらっしゃいますので、理事長や木次^{きすき}さんとも顔なじみなんです」

「……………」

カウンセリングルームどころではなく、人類史上に残る発明に貢献していた都市防衛部の実態に、十路は絶句する。

「……謎が多い方と聞いてましたので、まさか日本でお目にかかれ

るとは、思っていないませんでした」

十路は差し出されたままのコゼットの右手を握る。『相手は王女様だから、手の甲に口づけしろって意味じゃないよな?』と若干の不安を持って。

「国の者からすると、王族らしからぬ行動をする私は恥なのですよ。だから日本にいるのも公にはおおやけされていけないのです」

ただの握手で正解だったらしい、自然な笑顔を崩さないまま、コゼットが返す。

「防衛部のように、私の思惑で動いて頂ける《魔法使い》の方々がおられると、非常に都合がよろしいので、現在は神戸ごうどを拠点に個人で活動しています」

「研究機関や企業とは契約してないんですか?」

「……契約してると言えませんが、基本的にはフリーです。実家の都合もありますので……」

少し言いづらそうなコゼットの言葉に十路も納得。歴史ある家はなにかと制約やしが多岐が多い。

王家を『実家』と呼ぶのは妙な気がしないでもないが。

00 | 080 PM 17 :: 55 ユゼット・ドウ||シャロンジェ (後書き)

異世界モノではないですが、テンプレート『王女様』追加。
ちなみに現実では『ルクセンブルグ大公国』で、微妙にフィクション入っています。

1 / 9 誤字修正

00 | 090 PM 18:22 事件発生（前書き）

やっと話が本格化、一番最初につながります。
以前仕掛けた伏線に、勘のいい方は気づける話かと。

00 | 090 PM 18:22 事件発生

「それで、木次^{きすき}さん。彼は？」

車1台分の車間距離を取るオートバイを、コゼットは視界に収めながら、タクシーに同乗している樹里に訊く。

「お話しした通り、防衛部^{ウチ}の体験入部をされてる方です」

王女の割にタクシーを使おうとするコゼットに驚く十路に、『自称…庶民派』と説明し乗り込んだ。

その際、話があると樹里に同乗を促して、2人はタクシーに乗り、十路だけでオートバイを運転して、追従している。

コゼットがやはり気にするは、顔見知りの樹里について来ていた、初対面の男子（元）学生。

「あのバイクは、彼の持ち物ですの？」

「や、今日防衛部^{ウチ}に来た新しい備品です」

「では、バイクに載せてあるケースは？」

「片方は私ので、今日になってボックスが変わったんです。もうひとつは堤さんの荷物です」

「ああ……あれがそうでしたか」

「あの、もしかして、私の新しいボックスを作ったのは……」

「理事長に頼まれて、私があのサイズ^{わたくし}のケースをひとつ作りましたので、きつとあれがそうでしょう」

「やっぱり……」

樹里の言葉に、唇に拳を当てて考え込むコゼット。

「あのケースの中身が私の想像通りだとすると、理事長らしからぬ入れ込みようですわね……そこまでして防衛部に欲しい人材ですか」
「詮索は部則で禁じられてますから、詳しいことは私は知りません」
「技術者として気になっただけで、私も深く訊くつもりはありませんよ」

「あと、いいんですか？ 堤さんにあんなウソついて」

「あら？ ウソはついていませんよ？ 確かに立場を、少しごまかしはしましたけど」

「それに、いつまで王女サマ続ける気ですか？」

「いつまでもなにも、私は死んでも王女ですけど？」

樹里の呆れ顔に、コゼットは異性どころか同性も魅了する笑顔を返す。

「つばめ先生から口止めされたから、なにかと思ったら……」

「理事長は人をからかうのが好きな方ですし、私はいつも通りにしているだけで——」

不意にタクシーの窓ガラスがノックされた。

内輪の話をしていた2人が振り返ると、オートバイの十路が並走している。

パワーウィンドウが開けられると、十路は器用に樹里のヘルメットを差し出し、耳部分を軽く叩く。

「はい、堤さん、どうしました？」

『話がある』というジェスチャーに、ヘルメットの無線を使って呼びかける。

「追跡してくる車がある」

タクシーはほぼ一本道の人工島から本土、神戸市街地に入っている。

後ろには何台も車が走っているが、当然交差点があるものの、同じ方向への交通量も多く、樹里の目には特別不自然な点はない。

「2台後ろにブルーナンバーのベンツ。王女様に関係者かどうか訊いてくれ」

「ぶるーなんばー？」

「外交官車両のことです。きっと私の関係者ですよ」

十路の無線を聞いていなくても、樹里の雰囲気の内容を察したのだろう、コゼットが答える。

外交特使や領事館員が使う、有事の際には日本の法律は適用されない車。特別に青いナンバープレートが使われているため、こう呼ばれる。

王女がタクシーに乗っている方が不自然なので、そういう車があるのはむしろ自然と、樹里から返ってきた返事に十路は納得。

「その後ろに1台はさんでミニバンと、ずっと離れて単車オートが付いて来てるようだけど、そっちもなのか？」

「え？」

丁度カーブに差ししかかったので、後続車の様子がよく見える。

黒塗りのベンツ、そしてその後ろに国産の白いミニバンが続いて走っている。

十路が言うオートバイは、車列に隠れて確認できなかった。

「お国の関係者の方、黒のベンツ以外にもいます？」

「？ 変ですね？」

樹里の問いにコゼットも振り返り、首をかしげ。
そして樹里のヘルメットを借り、十路と直接無線で話す。

「堤さん、その車が私たちに近いかすると考えてますか？」
「ただの偶然という可能性も十分ありますが、気をつけておくことに越したことはありません」

ごく普通に応える十路に、コゼットは内心舌を巻く。

（一般人が考える危機管理ではありませんよ……）

それを知ったから、どうということはないのだが。

「……現状では放置ですね。不審だという確証ありませんし」
「了解」

短い返事だけを残し、会話は終わり。

コゼットとしては好ましくない好奇心。どうしても考えてしまう疑問が浮かぶ。

（『ブルーナンバー』なんて言葉までご存じとは……どうやら堤さんは、相当マトモな経歴ではない方のようですね？）



タクシーが停まったのは、マンションに似た建物。
そのすぐ後ろにオートバイを駐車させ、十路はヘルメットのシールドを跳ね上げ、その建物を見上げる。

「ルクセンブルグ公国の在外事務所……か」

「神戸は《魔法》の最先端研究都市。外交的な思惑が絡みますから、他の国でも政府直属の在外公館が多く置かれています」

ちゃんと料金を払い、タクシーを降りたコゼットが説明を付け加える。

「どうも日本の方は、『在外公館』と言う言葉に馴染みないようですけど、堤さんは？」

「大使館や総領事館といった他国内に設置した政府出先機関の総称。ちなみに普通の日本人は、そうそうそんな場所に用事ないので、馴染みないでしょう」

「よくご存じですね」

「……俺、試されてます？」

「いいえ。そんなつもりはありませんが、ご不快に思われたら申しわけありません」

ごく自然な気さくな笑顔を向け、コゼットは十路との話を終わらせた。

「ここでタクシーを降りて、木次きすけさんはどうされるんですの？」

「バイクの後ろに乗せてもらいますけど？」

「そのスカートでバイクに乗りますの……？」

「あはは……2人乗りに慣れていますから、大丈夫ですよ」

内輪の会話を始めた2人を後目しりめに、十路は軽く周囲を見渡す。

客と荷物を降ろしたタクシーは発進し、暮れ始めた街中に新たな客を求めて走り去った。

少し離れたところに、黒いベンツが停まり、乗っていた護衛らしきスーツ姿の人物は、1人だけ降りて王女の様子を離れて伺っている。

る。

その車の後に続いていたミニバンとオートバイは、ここに来るまでの交差点で別れた。

大きな通りからは外れるので、多くはないが、車や人通りは少ない場所。

（警戒することなかったか？）

ごく普通とは言えないが、特に気になることがある光景ではない。相手が王女でも、ここが高級ホテルの前だったら、まあある場面だろう。

（あの人の食えない理事長のことだから、俺に王女様の護衛をさせる気だったのかと思ったけど……考えすぎか）

十路は軽く頭を振り、考えを捨てる。

そして自分を省みて、人の言葉を素直に受け止められなくなったことに愕然とする。

「前の学校のせいで、腹黒くなったもんだなあ……」

「はい？」

コゼットとの話を終わらせて、近づいてきた樹里に、ただのひとりごとだと軽く手を振って否定。

それで小首を傾げながらも、樹里は追及しないことにしたらしく、自分のヘルメットを着けて、リアシートに跨る。

「それでは失礼します」

「えーと……殿下、またです」

「ええ。それでは、気をつけて」

見送るつもりらしいコゼットに一礼し、オートバイは発進。修交館学院に向けて、ゆるやかなスピードで出発した。

「王女って割には、気さくな人だな」

「……間違いではないですけど……」

「どういう意味？」

「あ、や、なんでもありません。それより堤さん、これからどうするんです？」

「転入のことかあ……」

「あ、それもですけど、泊まる場所――」

樹里と和やかな会話をしつつ、安全運転で帰ろうとしていて。車の衝突音、そして破裂音が後ろから、かすかに聞こえた。

「ひゃあ!？」

反射的と言っていい速度でアクセルターン。ハンドルを切り、車を傾け、後輪をすべらせ180度旋回。振り落とされそうになった樹里は、慌てて十路の腰にしがみつく。

「堤さん!？　なんですか!？」

「王女様が襲われてるかもしれない」

「え!？」

なにか確証あつての行動ではない。ただの交通事故だと考える方が自然。

しかし十路が一番信用している己の感覚に従う。

それは、直感。

それが十路の中のスイッチを切り換えた。

「間違いだったらそれでいい」

「お願いします！」

アクセル全開。速度制限なんて無視、1秒未満で100km/hオーバーという、普通のオートバイでは不可能な急加速で来た道を戻る。

あっという間に先ほど停車した場所、ルクセンブルグ公国の在来事務所前が視界に入る。

そこには、タクシーを追いかけていた黒い外交官車両と、どこかに消えていたミニバンが衝突している。

車の中の王女の護衛らしき人物は、エアバッグに挟まれてる。

外に出ていた護衛1人は、動きが止められてる。先ほどの破裂音は、警告射撃によるものだろう、銃を構えた覆面姿の男が警戒している。もちろんモデルガンなんて甘い考えは即座に捨てる。そして。

「なんですか貴方たち——！？」

やはり顔を隠した男たちが、白いバンの中と外から強引に乗せようとされているコゼット。

「歯あ食いしばって腹に力入れろよ！」

「え！？ ちょっと堤さん——！？」

相手に向けて一言警告してから急ブレーキ。一応の手加減はするものの、それ以外は遠慮も躊躇もない。

「轢いた——！？」

衝突と共に誘拐犯の1人はコゼットから引き剥がされ、オートバイの停止と共に慣性で前に吹っ飛んだ。

突然現れたオートバイにより、成人男性が軽々と飛ぶ、銃が出てくる以上にある意味あんまりな状況に場の空気が凍る。

「よし」

「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」

「前の学校で何回もやったから慣れた」

「どんな学校ですか!？」

「そんなことより――」

車外に出ていて固まっている、もう1人の男に指を向ける。

「あっち、木次の担当でいいのか？」

「え!?! あ、はい!」

言葉の意味を理解した樹里が、車体後部右側、自分の右足の下のケースを叩く。

「《E―W―S》解凍!」

声紋認証と指紋認証完了。即座にロック解除、軽快な動作音を上げて開き、短い機械の腕が中身を渡す。

それは技術者としてのコゼットが作り上げた魔法研究の成果、空間圧縮技術を使い、外見以上の容積を持つ収納ケース。通称『アイテムボックス』。

40cmほどのケースに絶対に収まるはずのない、2mもある《^{アビestool}魔法使いの杖》――登録名称《E―W―S》が飛び出した。

樹里はそれを小脇に抱え、威嚇射撃を行った犯人に向けて集中。《マナ》を操作し、男の真上に発光する幾何学模様^{EC-Sircuit}が展開させる。

「実行！」

術式《雷撃》 名前そのままに、小規模な落雷が発生し、男を直撃した。

幸い犯人1人の感電だけで済んだが、伝導体の多い街中。被害がどう周囲に広がるかわからない状況で、電気を中空に流す樹里に、十路は軽く引いた。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」「ちゃんと手加減しましたよ!？」

「銃が暴発したらどうする気だったんだ？」

「えーと……結果オーライということ……」

予想外の不穏な状況に、しばし時間が止まっていたが。

「離しなさい……!」

誘拐犯は仲間2人を見捨てて、王女を強引に車に乗せ、バックで慌てて遠ざかる。

樹里もさすがにコゼットが乗った車に向けて《魔法》を使うことができない。

十路はそもそも《魔法》を使えないから、それを止める手段がない。

「それで、どうすればいい？」

「追ってください!」

「了解」

自動車追突事故、銃の発砲、そして誘拐事件、そこにオートバイ

が乱入、小さなケースから長大な杖が出現し、小規模な落雷が発生。いくら《魔法》の研究都市とはいえ、平和な街中ではありえない光景を、少なくとも人間が見て固まっていたが、そんなことは構わない。

誘拐犯2人は放置、人目の場所なら誰かが対応してくれると判断。

「やっちゃまった……」

直感が当たってしまったことと、自分が望む『普通の生活』を壊すことを後悔をしながらも、王女をさらった車を追跡した。

00 | 090 PM 18 : 22 事件発生（後書き）

1 / 11 ルビがくどいので少し修正

00 | 100 PM 18 :: 32 接敵機動（前書き）

妙なところで切っているので、今回は短いです。
今までも文章量はマチマチですが……

日が暮れはじめた国道2号線を西に進む道中。

意図的に追突事故を起こした車は、駆動音に異音を混じらせているが、日本の技術の優秀さを示し、動きには支障がない走りを見せている。

十路は無理をせず、100m以上の車間距離を取って、その車を追跡する。

ちなみに樹里は、そのオートバイの後部座席で、長杖を脇にかかえてやりにくそうに、携帯電話をいじっていた。

「木次、どこまで介入する気だ？」

今まで多少丁寧に『さん』付けで樹里を呼んでいたが、もうそんな余裕はない。

「本当なら俺たちが、こういう事に首を突っ込むのはよくない」

「私たちが一般人だからですか？」

「それもだけど……」

警察に限らずだが、組織は外の人間の介入を嫌うことが多い。自分たちのやり方とは違う人間に、状況を荒らされたくないからだ。

更に一般市民が凶悪と予想される事件に関わると、余計な被害を増やすことにもなるからだ。

しかし十路が言いたい意味は、少し違う。

《魔法使い》はその能力ゆえに、刑事事件を含む普通の人間の生活に触れることは、原則禁じられているからだ。

「それに事件に巻き込まれてるのは外国の要人。外交上の問題もある」

るはずだから、俺たちが介入するのは余計好ましくないはずだ」

「大丈夫です。今、つばめ先生にメールしましたから」

「いや、理事長に連絡したところで、なにも関係ないだろう？」

「学校では防衛部はなんでも屋と説明しましたが、固い言葉で説明すると、少し意味が変わるんです」

固い言葉、つまり公式な発表。

「有事の際には警察・消防・自衛隊に協力し、事態を解決する民間の高度緊急対応実験部隊」

「部隊？ どこまでやる気だ？」

「場合によっては戦闘行為まで。許可されているというより、そんな『依頼』が来たら義務です」

「マジか……？」

その言葉で、この部活動の存在に、ある程度の納得もできる。

《魔法使い》は国家に管理される人材。しかし樹里は普通の生活を送っている。

それが許されている理由が、これなのだろう。

政府機関に組み込まれていない理由、修交館学院自体や理事長であるつばめの正体に、若干の疑問は残るが、なんらかの超法規的措置や裏取引があると考えると納得できなくもない。

そしてふと、つばめがコゼットの出迎えを『お願い』した時のことを思い出す。

こんな事件になる可能性があったからこそ、樹里と一緒に十路を行かせたのではないだろうか。

「とは言っても、こういう事態は私も初めてですけど……」

「……色々言いたいことはあるけど、どうするんだ？ 俺たちで王女様を取り戻す気か？」

「それができればベストですけど……」

「現状、木次の《魔法》でどうにかできる方法は？」

「や、普通の《雷撃》だと車に効果ないですし、有効な手段となると、周囲の被害と人命を保障できません……」

「おい……中間どころの丁度いいのは？」

超強力な射出式スタンガンテザーガンの他は、ミサイルしか持っていないような状況に、十路は複雑な気分になる。オートバイの後ろに乗って、自分のベルトを片手で掴んでる少女が、普通の女子高生ではないという再認識と共に。

「ああもう……！ 《魔法》が使えても、こういう時には全然役に立たないなあ……！」

「《魔法使い》おれたちはそんなもんだ」

それでも一応、対応策の為に確認を取る。

「木次。王女様の安全は第一として、犯人の確保と解決の迅速さ、どっちを優先するべきだ？」

「スピード優先で。《魔法》の使用を許可されてるのは、淡路島の『塔』を中心とした半径130km圏、この街を出られると、私になにもできなくなるんです」

「となると……大阪まで行かれると面倒になるな」

救出には大問題が一つ。既に樹里が《雷撃》で行動不能にしていた誘拐犯は、銃を持っていた事。他の犯人が持っていないのを期待するのは間違いだ。

現状としては十路たちが不利ではあるが、有利な点もある。

誘拐犯の反応から察するに、十路たちは正体不明のイレギュラーな存在であり、《魔法》についても詳しくない。

「最終確認だ。俺、基本的にトラブルに巻き込まれるのはご免なんだ」

ここで、なあなあ主義発揮。

先ほど誘拐を阻止しようとした空気はどこへやら、十路の空気はいつも通りの怠惰な野良犬。

「や、誰でも誘拐事件に巻き込まれたくないと思いますけど……」

「王女様がどういう理由で誘拐されたかはわからない。だけど早々に傷つけられることはないだろうし、むしろ強引に俺たちがしゃしゃり出ると、巻き添えくろう可能性がある」

「う……確かに」

「それでも俺と木次でなんとかするべきだと思うのか？」

「……………」

00 | 100 PM 18 :: 32 接敵機動（後書き）

1 / 1 1 ルビ修正

00 | 105 PM 18 :: 44 インターミッション03 (前書き)

必要があるのか微妙ですが、
またも別視点の文章。
短いので連続投稿。

最初は慌てたものの、無理矢理連れ込まれた車が走り出すと、コゼット・ドウ||シヤロンジエは抵抗を止めた。

十路と樹里が1人ずつ、誘拐犯を行動不能にさせたが、車の中には運転手を含めてまだ2人乗っている。ならばここでジタバタする方が危険だと判断した。

(私が誘拐された理由はどちらかしら……？ 王女だから？ 特殊な技術者だから？ それとも――)

誘拐犯たち3人が怒鳴りあう声で、思考は一時中断。早口で慌てた様子なのはわかるが、なにを言っているのか理解できない。

コゼットは5ヶ国語習得。クアドリンガルルクセンブルグ公国の公用語は、フランス語・ドイツ語・ルクセンブルグ語。それに加えて英語と日本語も日常生活に困らないレベルで習得している。

そんな彼女でも理解できない、別の国の言葉を、犯人たちは怒鳴り合っている。

ギャンブルで一攫千金を目論むような、短絡的な行動を行う者は、自分が失敗することを考慮に入っていない事が多い。

どうやら怒鳴っている男はそういうタイプで、スムーズにコゼットを誘拐できず、仲間を2人失った狼狽を、怒りとして吐き出しているのだろう。

そしてハンドルを握っている、やはり覆面をした犯人は、それを諫いさめている様子。

(犯人たちの身長は高くても190cmはない。体は全員筋肉質。武装はピストル……サブマシンガンも持ってる？ 動きは統率が今ひとつ取れていない。スペイン語やポルトガル語の語感とも違う。

言葉の雰囲気からすると西・南・東南アジア圏の人間？)

彼女は少ない情報を元に、冷静に分析。

(軍人崩れか、犯罪組織の私兵でしょうか？ さすがに私が暴れて
どうにかできるとは思えないですね——)

そして現状最良と思える行動をコゼットは取る。すなわち、大人
しくする。

突然の自体にも平静さを取り戻し、取り乱さない辺りが、王女の
貫禄と呼べるものがある。

(それにしても——)

大人しくしている以外にないのだから、やることを言えば考える
こと。車に押し込まれる直前のことを思い出す。

(相手が誘拐犯とはいえ、あの2人、街中でムチャしますね……)

顔見知りの女子高生と、今日初対面の青年。

車の中の犯人3人が騒いでいるのも、あの2人が原因だろう。

突然現れた2人乗りのオートバイにより、1人は不思議な技で
感電し、もう1人は躊躇なくはね飛ばされ、見捨てることになった。

誘拐事件をスムーズにやろうなんて甘い考えだが、さすがにあれ
は想定外だろう、犯人たちの狼狽も理解できなくはない。

(しかし、神戸で自由に《魔法》が使える《魔法使い》マジックユーザーをご存じな
いとなると、どうやら防衛部自体をご存じない?)

ならば——

「——ッ！」

コゼットを強引に車内に連れ込んだ犯人の、小さく舌打ちで思考が止まる。

覆面で顔を隠し、そして彼女は知る由はないが、それは『アイマン』と呼ばれた少年。

彼は座席の下に入っていた金属の塊を、布に包まれたまま手にした。

（あれは——！？）

それを見て、コゼットは人知れず顔色を変えた。

00 | 110 PM18..46 会敵(前書き)

検証事項…戦闘描写

動きのある文章というだけでなく、普通は使うことのないオートバイでの戦闘描写……ちゃんと読んで頂ける方に伝わるのでしょうか？

「ん？」

犯人たちの車のスライドドアが開き、中から黒ずくめの男が半分体を乗り出し、手にした布に包まれた1メートルほどの『なにか』を十路たち^{とおじ}に向ける。

「ヤバっ！」

「きゃあ!？」

『なにか』の正体に気付いた十路が、『射線』から逃れるためにハンドルを切り、慌てて樹里が十路の腰にしがみついて。

重い音と共にアスファルトが爆発した。

「今の、なんですか!？」

「《魔法》だ……」

^{EC-Sircuit}

幾何学模様が一瞬路面に展開されたのを確認できたから、間違いない。

威力としては大したことないだろうが、オートバイを吹き飛ばす程度は十分なのは一目瞭然。

「犯人は《魔法使い》だ」

「ええ!？　なんで!？」

「念のため訊くけど、防衛部に関係ある人間か？」

「そんなはずないでしょう!？」

建前に近いものはあるが、『魔法使い』は犯罪を犯すことはあり

えない。

日常生活も国に管理され、《魔法》を使うために必須の《魔法使^{アベス}の杖》が高価なため、犯罪を抑止することにもなっている。

そして今この街で《魔法》を行使できるのは、学校での説明と、十路の常識と照らし合わせれば、都市防衛部の部員だけのはず。

しかし能力を行使し、犯罪を犯す前代未聞の《魔法使》が実際に存在する。

考えられる可能性。それはものすごく低いものだが、それしか考えられない。

「《魔法使》の犯罪者だが、しかし荒事には慣れてない半端者。俺たち……というより、《魔法使^{キシュキ}》が追いかけてきたから、パニックって攻撃してきたんだろう」

「なんでそんな人がいるんですかあ！」

「俺が知るわけない——っと！」

「きゃっ!？」

また《魔法》による射撃をかわしたことで、アスファルトの破片が飛び散り、オートバイの傍らを過ぎ去っていく。

それを冷静にかわしながらも、内心十路は首をひねる。

あまりにも攻撃が単調すぎる。この程度の小さな《魔法》も連射されれば、十路たちの追跡を振り切るには十分なはずなのに。

あるいは威力が小さすぎる。相手が使っているのは《土の槍》などと呼ばれる物質形状変化での攻撃だろうが、表層のアスファルトを破壊する程度に抑える理由がない。

十路たちの油断を誘っているという考え方もできるが、そうするとコゼットの誘拐時に使わなかった理由がない——

「……制圧するぞ」

「え?」

またも突然の十路の変化。スイッチが切り替わった。

「アイツの《魔法使いの杖》^{アビスツール}は不調だ！今のうちに叩く！」

「なんでいきなりやる気になってるんですかあ！？」

「ああいう《魔法使い》^{バカ}は大っ嫌いなんだな！」

アクセル全開。あっという間に車に肉薄し、並走するようにスピードを維持。

「借りるぞ！」

「え？」

樹里の長杖を借り受けて。

「ええええええ！？」

80km/hで走行するオートバイのタンク部に、十路は立ち上がった。

正気を疑う行動だが、十路は全く恐れず、高い場所の物を取るために、座っていた椅子に上がるような気安さで立っている。

《魔法使いの杖》^{アビスツール}は個人専用のものであるから、十路に樹里のそれを扱う事はできない。

だからただの長い棒として、その体勢のまま十路は長杖を繰り出す。

「――！？」

軽い金属音。

誘拐犯である《魔法使い》でも、さすがに十路の行動に驚いたようだが、それでも反応する。

十路は連続して長杖を繰り出す。

さすがに不安定な足場では、腰の入った打突は繰り出せないが、2mの長さを利用して一方的に攻め立てる。

だから《魔法使い》の誘拐犯は、防戦一方。

危なげなく鳩尾みぞおちを、顔面を、肩口を、喉を突こうと突き出される長杖の先端を、手にした金属の塊で不格好に払いのけるのが精一杯。

不意に反撃、ハンドルを握る誘拐犯が気を利かせ、オートバイをはね飛ばそうと、車が急接近してきた。

「木次！ 落ちるなよ！」

「ひゃあ！」

しかし十路は足でアクセルを吹かし、はね飛ばそうとする車を急加速で避けた。

「堤さん……！ これ、訊いちゃいけないってわかってますけど……！」

急加速で無人のドライバーシートにへばりついていた樹里が、恐る恐る身を起こし、タンク部分に立つ十路を見上げる。

危険なスタントを人前で見せるバイクパフォーマーも真っ青な度胸と平衡感覚。

十路も同じ人種だとはいえ、《魔法使い》に生身で挑むなど、ありえない。

常人には奇跡に思える能力を使う《魔法使い》でも、こんな別の意味で人間離れたことはできない。

だから樹里は混乱する。

「堤さんって何者ですか!？」

「昨日までは学生! 今日から住所不定無職!」

「そうじゃなくてええええええ!」

「つーかやりづらいなあああ!」

樹里と一緒に絶叫し、十路がオートバイのメーター部分を軽く蹴った。その途端。

「——つとお!？」

足場になっているオートバイがバランスを崩しかけ、左右に揺れたので、慌てて足でハンドルを押さえて拳動を安定させる。

「木次! ハンドル頼む! コイツ扱いづらい!」

「無茶言わないでくださいよお!？ ってゆーか私、無免許ですよ!？」

「今更だろ!」

文句を言いながらも樹里が座る位置を前にずらし、なんとかハンドルの握んだの確認。

「悪い!」

樹里をジャンプで跳び越して、十路はリアシートに移り、位置を譲る。

「こんな人間離れたこと、慣れてるみたいですね……!」

「前の学校で慣れた!」

「だからどんな学校ですかああああ!」

「それより来るぞ！　かわせ！」
「――！」

泣きそうになりながらも、樹里はハンドルを軽く切り、体重移動で横にかわす。

直後、後方の車から放たれた《魔法》によって、走る予定だった場所のアスファルトが砕ける。

「アクセルを緩めろ……ラインをもうちよい右……もう少し……そこだ。しっかり掴まっておけよ？」

「え……と？」

よくわからないながらも、大して難しいことではないので、十路の指示通り動かす。

20メートルほど後方を走る車を位置関係を調整。目標は車の横から乗り出して、《魔法使いの杖》^{アビスツール}を突き出している《魔法使い》の誘拐犯。

そして十路がオートバイの上で跳び、着地の衝撃で後部のサスペンションを縮める。

「前輪フルロック！」

サスペンションが反動で伸びるタイミングと合わせて、樹里にハンドブレーキを目いっぱい引かせた途端、オートバイの後部が高く跳ね上がる。

ストッピー。前輪だけで走るバイクテクニック。

急制動で減速、車のサイドミラーをふっ飛ばしながら、すれ違わざまに相対速度を車体重量を武器として、車外に身を乗り出していた犯人の顔面に後輪で強襲する。

「――ッ!？」

普通の人間なら考えたとしても実行できない攻撃方法。驚愕の目線と鈍い感触を残して、誘拐犯は車内後部に吹っ飛んだ。

「ダメだったか……」

体重をかけて後輪を接地させ、車の後方で追跡を再開したオートバイの上で、十路は内心舌打ちする。

これで厄介な《魔法使い》の誘拐犯が、車から落ちて確実に戦線離脱することを願っていたが、そこまでは望めなかった。

「ひいいい……!」

ちなみ樹里は半泣き。

タンデム
2人乗りライダーとしてオートバイ自体には慣れていても、前輪だけで走るストッピーに慣れているはずはない。

「木次、怖いかな？」

そんな樹里に、十路は冷静に訊ねる。

「怖いに決まってますよ……!」

「けどな、《魔法使い》同士の戦闘で、こんなの序の口だからな」

普通の女子高生相手に酷なことを言ってるのは、十路自身も理解している。

しかし、あえて気を遣うことをしなかった。

樹里も《魔法使い》ならば、覚悟をしなければならない事だから、と。

00 | 110 PM 18 : 46 会敵 (後書き)

ルビを振った固有名詞が多すぎでしょうか？

00 | 115 PM 18:50 インタミッション04 (前書き)

一応は話の進展に必須ではないオマケ文章。
短いです。

「きゃっ!？」

オートバイに『蹴り』飛ばされた誘拐犯——アイマンが、コゼットの隣の席に叩きつけられた。

後輪を跳ね上げたオートバイは、車との速度差を生ませ、後方に流れて着地する。

(すごい……!)

その姿にコゼットは、素直に感嘆する。

今は木次樹里きすきじゅりがハンドルを握っているが、二輪免許を持っていない彼女が、あんな真似ができないはコゼットも知っている。

全ては走行中のオートバイに立つ人物の指示だろう。

(トージ・ツツミ……)

特撮映画のような非常識な方法でオートバイを自在に操り、生身で《魔法使い》で平然と立ち向かう、今日会ったばかりの青年。

普通の経歴の持ち主ではないと、コゼットも推測していたが、予想以上のものだと暗に知らされた。

樹里と同様に、彼女も同じ感想を持つ。

(何者ですの……?)



丁度その時、他にも彼らを観戦する者がいた。

誰もが知る由もないが、誘拐犯の首謀者――アイマンと会った、黒いライダースーツに身を包み、フルフェイスで顔を隠した青年。

「ははっ！　アイツ、面白え！」

夕方の国道2号線を走りながら、十路たちは人目も気にせず戦闘しているのだから、少なくとも者がその様子を見、小さくない混乱を引き起こしている。

戦闘に巻き込まれないよう、同車線上の車は距離を開けているその中で、彼自身とは対照的な、メタリックシルバーのボディを持つデュアルパーパス・オートバイで追跡している。

そのオートバイの後部両サイドには、金属製のケースが乗せられている。

「まさかアイマンの様子を見ていたら……こんな見物ができるとはな」

ヘルメットの下で、その表情はわからない。しかし声の調子から察するに、浮かんでいるのは子供のような笑顔。

「あれが堤^{つみとおじ}十路か……話には聞いてたが、こんなヤツなのか」

彼は樹里やコゼットと違い、堤十路を知っていた。

実際には会った事はない。資料と聞こえてくる評判で承知しているだけ。

「『出来損ない』がどんなものか、見せてくれよ！」

黒い男は吼えると、オートバイのアクセルを全開にし、移動して

いる戦場に猛接近した。

00 | 115 PM 18 :: 50 インターミッション 04 (後書き)

1 / 10 誤字修正

00 | 120 PM 18 : 55 交戦(前書き)

検証事項…前々回と同じ車両での戦闘描写
もう少し長い方が読み応えがあるのかもしれない、
と思いつつ投稿。

「……木次。^{きよしや}運転代われ」
「ひゃっ!?!」

十路が樹里を押し退けてハンドルを握る。手にしていた長杖を本来の持ち主に押し付けて、腕の輪の中に樹里を収める形で。お互い体を押しつけ合っているが、そんなことは気にしてられない。

「ちょ、ちょっと――!?!」
「説明は後だ!」

体重を横に、フットペダルを踏み、車体を傾け、走りながら車高を低くして車体をコマのように360度スピン。

前輪だけで路面を滑走し、振りかぶって衝突させようとした後輪がその上を通過した。

「え? ええ!?!」

なにが起こったのか当事者以外は理解が及ばない一瞬の攻防。

突然接近してきたメタリックシルバーのオートバイは、十路にかわされた車体を下ろし、後進しながら向かい合う。

十路の操るオートバイは、回転から立ち直り、ごく普通に走行を再開する。

オートバイを一度でも扱った人間ならば、目を疑う光景。バックのまま高速で走るのは構造上不可能だし、車体を倒してその場でスピンしようとしたら普通は転倒する。

なのに彼らは平然と立ち直り、何事もなかったように走っている。

「ハハッ！ この程度は避けるか！」

ヘルメットを通した黒いライダースーツの男の声が、風に乗って届く。

行動も、発言も、明らかに十路たちに害する気なのを証明している。

「犯人にまだ仲間がいたのか……」

「堤さん……！？ あのバイクの人……！？」

「ヤバイ……」

型こそ違うものの、十路がまたがるオートバイと、黒い男がまたがるオートバイは同じ物。

後部に据え付けられている金属製のケース。その中身は現状を見る限り、ひとつしか考えられている。

十路は相手の正体を、よく知っていた。

詳細な正体もここに理由も不明だが、今の行動を見る限り、考えうる最悪の相手と承知している。

《魔法》が使えれば話は別だが、『出来損ない』が勝てる相手ではない。

「あいつも《魔法使い》だ！ 誘拐犯より確実に強い！」

十路の言葉をきっかけにしたように、銀色のオートバイが襲いかかってきた。

車線の進行方向を逆走し、ウィリーで前輪を持ち上げて仕掛けてくる。

「木次！ 振り落とされるなよ！」

「ひゃっ！」

対し十路はスライドターンで後輪を滑らせ回転、アタックをかわしたと同時に、相手の後輪にこちらの後輪をぶつけようとする。

銀色の車体は即座に浮かす車輪を後ろから前に入れ替え、ストツピーで十路のアタックをかわす。

走りながら車体を滑らし、回転。それを2人と2台は完全に制御している。

（さすがだな……！）

予想通りの反応に、十路は奥歯を噛み締める。

（まあまあだな……）

ライダースーツの男は、ヘルメットの中で口元を歪める。

スキール音を響かせて、距離を開いて睨み合い。

そして双方同時に距離を詰めながら、後輪を浮かせて振りかぶる、ジャックナイフターン。

本来不整地での方向転換の技を武器として、リアを衝突させ合った。

交通事故を思わせる鋼の衝突に、銀と黒のオートバイが弾かれたように距離を取る。

ハンドルのレバーとスロットル、そしてフットペダルを忙しなく操作し、エクストリームバイクーーバイクで行うパフォーマンスイーを思わせる攻防。

まだこれが広場で行われているものなら、まだ納得できなくもない光景。

しかし彼らは一般道で、しかも逃走中の誘拐犯の車を追跡しながら

ら、ただスピードを競うだけでなく、車輛を武器に物理的で非常識な戦闘を行う。

（木次が援護してくれれば——！）

前に座らせている樹里が《魔法》を使って戦闘に参加してくれば、事態は変わるのだが。

「~~~~~！！」

急激なGと衝撃から、振り落とされないように機体にしがみつくのが精一杯。

それとも初めての本格的な殺し合いに、硬直してしまっているのか。

いずれにしても、とてもではないが、支援は期待できそうにない。

（機乗戦闘なんて初めてだろうからな——）

不意に視界に入る、逃走中の車。

床に倒れているらしく、仰向けに顔を出す覆面姿の誘拐犯が、開かれたスライドドアから上体を出している。

《魔法使いの杖》^{アレスツール}を十路たちに向けて。

「しまっ——！？」

気づいた時には遅かった。

^{EC-Sircuit}幾何学模様が描かれた路面を踏んだ。

普通に追跡していた時ならば、十分対処できただろうが、銀色のオートバイとの戦闘をしていた最中。

デリケートなコントロールを失い、アスファルトが砕ける程度に隆起した地面に、オートバイが跳ね上がり、体が宙に投げ出された。

「きゃあ!?!」

「木次!」

せめて守ろうと、樹里を腕の中に抱えたまま、投げ出された路面をオートバイと一緒に滑る。

サーキットとは違って、一般道に転倒対策なんて施されていない。

「が——っ!?!」

樹里の体重を受け止めて、走っていたスピードそのままに街路灯に叩きつけられた。

体の何かが壊れる感触に、意識を飛ばしたらしい。

十路の認識で次の瞬間には、泣きそうな樹里の顔が視界いっぱいに見えた。そして視界の隅には路面に転がって腹を見せているオートバイ。

「——さん! 堤さん——!」

完全にはかばい切れなかったのだろう、樹里の制服は一部裂けて、剥き出しの手足から血を流している。

そんな樹里の姿を見て、なぜか十路は場違いなことを口に出してしまった。

「……だから……スカートで乗るなって……言っただろ……」

言葉を残し、十路は本格的に意識を失った。

00 | 120 PM 18 :: 55 交戦(後書き)

1 / 11 表現修正

00 | 130 PM 19 : 29 交渉（前書き）

視点が主人公に向けられたものではないですが、必須の文章です。

誘拐する時に、故意に事故を起こした無理がたたったか、誘拐犯たちの車の動きが悪くなった。

遠くに逃げるには別の手段が必要だと、リーダーであるアイマンは判断し、車を放棄、予定を変更した。

神戸市自体は脱出したが、隣の市である西宮市、淡路島に存在する《魔法》の発生源『塔』の130km圏内。阪神工業地帯を成す、工場の一つを占拠した。

そこは大企業の下請け・孫請け業務を行っているという風の、社員十数人規模の小さな精機工場だった。

犯人3人、しかも一人は顔をオートバイと衝突して負傷しているが、威嚇射撃するだけで、残業で残っていた数名の社員を制圧が可能だった。

表はシャッターを降ろし、出入り口は全てカギをかけて封鎖し、その工場の事務所、スチール製のデスクが2つあるだけの6畳ほどのスペースに、銃を突きつけられたコゼット・ドウ||シャロンジェを含めて、社員全員が連れ込まれた。

（どうもこの犯行は行き当たりばったりな雰囲気ですね……）

言葉は通じていないが、特に反抗しようとはしないので、犯人たちにとっては扱いやすい被害者であったが、落ち着き過ぎていることに不審を覚える者もいた。

だから彼女は今、ガムテープで腕を固定されて、椅子に座らされた。

「……なんなんだ、あいつら……」

作業服を着た中年の社員が呟く。
他の社員たちも口に出さないまでも、彼と同様に銃を持つ乱入者に混乱している。

「大丈夫ですよ」

そんな彼らに、コゼットは微笑する。

「座っててください。彼らは下手に刺激しなければ大丈夫です」

彼女は自分自身の社会的立場を理解している。

いかなる理由であっても、犯人たちの目的が達せられないうちは、大人しくしている限り安全であろうと。

そして彼女は自分の見た目の価値を理解している。

『女の武器』と言われればそれまでだが、王女の微笑みは人を魅了し、こういった場合は平常心を誘う。

「あ……はい……」

金髪碧眼の女性に流暢な日本語で語りかけられ、中年の社員は呆気にとられながらも、部屋の隅に他の社員たちと固まって腰を下ろす。

それに安心し、自分の事情に赤の他人を巻き込んだことを、コゼットは申しわけなく思う。

（それにしてもあの娘たち、大丈夫かしら……？）

そして同様に巻き込んでしまい、戦線離脱した樹里と十路のこと

を心配していた。

「アイツらなら死にはしねーよ」

心の内を読み取ったように話しかけるのは、十路たちと戦った、黒いライダースーツをまとった男。

直接ではないが、樹里たちを打ちのめした人間に、コゼットは視線に力を入れた。

「オイオイ、警戒するなよ。オレは別に連中の仲間じゃねーぞ」

「でしたらなぜ、修交館学院の防衛部の方々と戦ったのですか？」

「面白そうなヤツがいたから、力試しを試してみたくなったんだ」

戦闘狂のような返答は、少なくとも半分は本心だろうとコゼットは見当づける。

この黒い男の言葉からは、端々から人を食ったような空気が感じられる。

「……では、貴方までここに来たのは？　それでも仲間ではないと？」

こちらには注意も払っていない、部屋の隅でなにか相談している誘拐犯3人を目で示す。

「無関係とは言えないな」

隠す気もないらしい、黒い男はヘルメット越しのくぐもった声で語る。

「オレを雇ってるヤツに、アイマン——あの《魔法使い》な？　ア

イツも雇われてたんだ」

携帯電話でどこかに連絡をし始めた犯人、彼が主犯かと納得する。《魔法使い》を雇うという行為は、世界の常識からはありえない。少なくとも表側には。

高価な《>魔法使いの杖—アビスツール<》を用意できるだけの規模を持つ、犯罪組織かと推測する。

「けどな、雇い主の意向で、アイツは>解雇—クビ<にすることになった」

「その理由は？」

「《魔法使い》にはありがちだが、自分が特別な人間だと思っているからだ」

その言葉にも納得する。

遺伝学的に数千万分の一の確率で持って生まれ、アビスツール《魔法使いの杖》を持てばなんでも可能とする能力の持ち主。

だから貴族や神のように振舞いたがる者がいる。

「それに、どうも甘い。悪い意味でな」

「納得ですわ」

行き当たりばったりと思える犯行。そして今、コゼットたちが話していることを注意もしない。

大きな犯罪を起こすには、もっと綿密な計画と、過ぎるぐらいの慎重さが必要だろうに、アイマンは気にしている様子はない。

「そんなのを雇っていたら、自分たちも危ない。だから雇い主は関わりを断とうとしたんだろう」

「彼は了承しましたの？」

「納得するような性格だったら、自分が特別だなんて勘違いしねえ」
「それもそうですわね」

「だから、オレは頼まれて、仕方なく直接引導を渡してやったわけだ」

「それは終わったことでしょう？　なぜ貴方はまだ彼と一緒にいますの？」

「これも雇い主の意向だ、アイマンの《魔法使いの杖》アビスツールを完全には破壊せずに解放しろ、だよ」

シェードの効いたヘルメット越しに、黒い男はコゼットを見下ろす。

笑いながら自分を見ていると、彼女にもわかった。

「そしたらアイマンのヤツ、面白いことを計画しててな？　銀行襲って資金作って、軍人崩れの仲間と、どこからか武器を集めて、お前を誘拐しようだなんてな？　それで予定を変えた」

「私が誘拐された理由は……」

「お前に《魔法使いの杖》アビスツールを修理させるためだ」
「迷惑なお話ですね……」

王女としてではなく、そちらの理由か、とコゼットは納得する。

《魔法》に精通し、空間圧縮技術というファンタジーの産物を現実にした、技術研究員としてのコゼット・ドウ||シャロンジェの能力のために、この事件に巻き込まれた。

普通の人間がどうこうできるものではないが、フリーで研究活動し、《付与術士》エンチャンターとまで呼ばれる彼女ならば、納得のいく話でもある。

ここまで普通の音量で話していたのに、男が身がかがめ、コゼットの耳元で囁く。

「コゼット・ドウ||シャロンジェ。いい事を教えてやる……」

その声はこの男の危険性が滲^{にじ}み出ている。

例えるなら、狩りをする前のオオカミの舌舐めずり。

「アイマンはアンタのことを詳しくは知らない……多分、他の連中もだろう」

「……え？　ということとは……」

「きつとお前の想像通りだ……」

「……………」

十路と樹里を相手に戦闘していた相手の言葉を信用できるものだろうか。

コゼットは頭の中で、これからの行動を考え、必要なものを導き出す。

「……3つ、お答えください」

気さくな20歳の女性としてではなく、彼女は王女の顔で命令した。

「ひとつ、貴方は敵ですか？　味方ですか？」

「お前の味方ではないが、アイマンの味方でもない」

「ふたつ、貴方の言葉を信用するに足る根拠は？」

「そりゃ無理だな。オレがなにを言おうと、アンタが納得できる証明にはならないだろ」

自分の怪しさを理解していると、ライダースーツに包まれた肩がすくめられる。

それは当然。むしろ信頼できる要素の方がない。

「これが証明になるかわからないが……」
「？」

「オレが行動してるのは、雇い主の意向ってのもあるが、オレが面白そうだって理由の方が大きい」

「……………ふう」

コゼットが呆れのため息をつく。

「オレのこと、バカだと思ってるだろ？」

「ええ、まあ、ハッキリ申しあげまして」

しかし、この男はウソをついてはいないと、彼女は判断した。
本当のことは言わなくても、だますことはしていないだろう。
王女としての自らの人物鑑定眼を信用することにした。

「それで、最後の質問はなんだ？」

「貴方のお名前は？」

「……………市ヶ谷^{いちがや}とでも呼べ」

考える間は、偽名を考える時間であったか。それでも呼び名を確定させた。

「ナニ話してマスカ？」

電話連絡が終わったらしい、覆面をしたままのアイマンが2人に近付いて来る。

しかしそれは、黙っている、大人しくするなという意味ではなかったらしい。

「――なぜ、アナタがイルのデスカ？」

コゼットには口を閉じているとも言わず、市ヶ谷に向けて語りかける。

「心配しなくても、そろそろ消えるさ」

「手を出さナイと言いまセンでしタカ？」

「んー？　ちよつと面白そうなヤツがいたから、どの程度のモンか確認してみたかっただけだ。ああ、あのままだったらお前、あのバイクに乗っていたヤツに殺られてたかもな」

「……！」

言った本人としては、その言葉はただの事実と告げた。

しかし受け取った方は侮辱と受け取った。自分を特別だと思っているから。

《魔法使いの杖》アレックスツールの先端が、ライダースーツの胸に突き付ける。

「……………」

アイマンは射殺するような視線を、市ヶ谷に向ける。

「……………」

市ヶ谷の顔に浮かんでいる感情はわからないが、少なくとも恐怖はしていない。

2人の空気が凍り、それが伝播し、周辺の物音がよく聞こえる。常識外の戦闘を人目の付く場所で発生したため、騒ぎになっているのだろう。パトカーのサイレンが複数聞こえる。

突き出されているのは銃ではなく、普通の人間にはよくわからない

い金属の塊。しかし部屋にいた者全員が、意味はわからないながらも、高まる緊張感を感じて硬直する。

「……そんな事している暇があるのですか？」

そんな空気を壊したのはコゼット。

銃を向けられても動じなかった彼女は、この程度の緊張感を物ともしない。

「貴方は私に、その《魔法使いの杖》^{アビスツール}の整備をさせる気なのでしょう？」

「……ハイ」

『市ヶ谷』に突き付けられていた《魔法使いの杖》^{アビスツール}の先端が、上に向けられる。

それで部屋の緊張感が少し緩んだ。

「《魔法使いの杖》^{アビスツール}を整備できる人間は、限られている上に、自由にはなりませんしね」

ファンタジーでも大抵は、魔法の物品を作ることのできる魔術師は限られる故に、その物品は珍重されている。

現実でもそれは同じ。とても高度な技術が必要とされる。

「だからどこにも所属していない私を誘拐し、最低限の設備がそろっているだろうと想像し、この工場を占拠したのでしょ」

そして人員以上に設備も重要。おいそれと場所を問わずできることではない。

要はそれ専用の工房か、それに準ずるものが必要となる。

「確かに私なら、その壊れかけた《魔法使いの杖》^{アビスツール}を修理できます」

それだけの技量を持つからこそ、彼女は《付与術士》^{エンチャンター}と呼ばれている。
しかし彼女は――

「ですけど、そのお仕事、お断りします」

再び空気が硬直した。

「……アナタ、立場、わかってマスカ？」

怒りを抑えた声と共に、今度はコゼットの額に、半壊した《魔法

^{スツール}使いの杖》が付きつけられた。

そのまま《魔法》を発動させられれば、銃で撃たれたよりも悲惨な顔面になるだろうが、コゼットは微笑みすら浮かべてそれを受け入れる。

「貴方こそ、ご自分の立場をわかっておられますか？」

「……？」

「私を殺したければどうぞご自由にどうぞ。ただし《魔法使いの杖》^{アビスツール}を作れるほどの技術者は、私が知る限り日本には20人ほどしかいません。次を見つけるのは大変ですよ？」

話している間にも、建物の外から聞こえてくるパトカーのサイレンが、そう遠くない場所で止まった。

通報を受けたか、乗り捨てた車でも見つけたのではないだろうか
と予想する。

「いずれ警察にここを見つけれられるでしょう。しかし貴方は、私にここで《魔法使いの杖―アビスツール》を修理させて、《魔法》で切り抜ければ問題ないと踏んでいたでしょう？　しかし《魔法》を扱わず、銃撃戦でも繰り広げて、脱出できる勝算がありますか？　」

凶星を突かれアイマンはしばし考え、手にした得物の先端をコゼットからどけた。

「……望みハなんデスカ？」

「ここにいる、巻き込まれた無関係な方々の解放です」

その言葉に、部屋の隅に固まっていた、巻き込まれたこの工場の社員たちが、喜色の息を呑む。

「《魔法使い》の事情に、普通の方を巻き込むなど、誰かから教わりませんでしたか？」

「……ワカリマシタ」

仕方がないといった風にアイマンはうなずき、コゼットもそれに応じてうなずく。そして。

「それから、仮称…市ヶ谷さん」

「ん？　オレ？」

「貴方も一緒に出て行って頂けます？　　どうやら因縁がお有りのようですし、貴方がいると話が複雑になりそうですから」

「最初からそのつもりだ」

ライダースーツの肩が、またもすくめられる。

とりあえずはこれでいい。巻き込んでしまった一般人を解放でき、

これからのことをやりやすくしただけで十分だと、コゼットは満足した。

「――さて、《魔法使いの杖》^{アビスツール}を修理するなら、必要なものがありますから、揃えてください」

「なんデスカ？」

「可能な限り高性能なパソコン。それとは別の電子機器。壊れてても構わないので、携帯電話が大量にあると便利がいいですね」

コゼットは素人の考えでは、『魔法』とは無関係と思えるものを要求した。

「それから、私の工具箱を届けるよう、修交館学院の理事長に連絡してください」

00 | 140 PM20..45 世界の理1 (前書き)

検証事項…諸設定説明

実験のためにわざとこうしたのですが、ようやく諸設定の説明です。

市ヶ谷^{いちがや}と名乗ったライダースーツの男と、一時人質になっていた工場の従業員たちがいなくなり、たった2人だけしかない事務所で、コゼットはドライバーを置き、外装のプラスチックの塊を軽く投げ捨てた。

犯人たちが集めた電子機器は、携帯電話、パソコン、HDDレコーダー、携帯ゲーム機。この工場と周辺で集められるものなら、この辺が限度だろう。

今は全て分解され、デスクの上で小さな山を作っている。

（わかってはいましたけど、大事になってますね……）

窓の外から大量のパトランプの赤い光が、室内に差し込んでいるのを見て、コゼットは小さくため息をつく。

これからの事——アイマンの《魔法使いの杖》^{マジックツール}を修理した後を考えると、この警察の包囲は危険なのだが、なんとか上手いことできないものかと思う。

「……なぜこんなものが必要なんだ」

「あら？」

コゼットの働きを見張っていた誘拐犯の一人が、アイマンよりもずっと流暢な日本語で声をかけてきた。

覆面をしているため正確にはわからないが、コゼットよりも年嵩で、落ち着いた雰囲気^{わめ}の男のように思う。車を運転していた、アイマンが喚^{わめ}いていた時には諫^{いさ}めていた犯人だ。

彼はサブマシンガンをいつでも撃てるよう持ったまま、分解した電子機器の基盤をしげしげと眺めていた。

「貴方も日本語を話せる方でしたか」

「ああ」

「『貴方』ではお話がしにくいので、お名前を聞かせて頂けませんか？」

「……グラームだ」

ちなみにコゼットは知るよしもないが、神戸市郊外のビルでアイマンが仲間を集めた際、報酬を見せても醒めた様子をただ1人見せていた男だ。

「それで、なぜこんなものが必要なんだ」

仕事に使っていたものだろう、この事務所には型落ちしたものでもデスクトップパソコンは最初からある。必要な補修材料は電子機器を分解することで、一応は確保。工場の方から延長ケーブルで電源も確保。

準備は終わり、工具箱が届くまでやれることはない。

暇つぶしに丁度いいかと思い、彼女はグラームに説明をする。

「Multirole Attribute Nanotechnology
Artifacts. Environmental Control.
Absolute operation Brain-machine
Interface System Tools. Organum
syndrome onset
er」

ずっと日本語を話していたコゼットの口から、金髪碧眼の外見からは違和感ない流暢な英語が飛び出す。

「グラームさん、どれか一つでも聞いたことがあります？」

「……いや」

「普通の方はご存じないでしょうね」

それにあのアイマンという《魔法使い》は、こういう話をするタイプではないだろう。

しかも普通の人間は『オカルト』という『常識』を持っている。本当ならじっくり時間をかけないと理解できないことだろうが、コゼットは少々イタズラ心を出し、一気に説明する。

「多機能特性のナノテク人工物 (Multirole Artificial Nanotechnology Artifacts)、環境操作 (Environmental Control)、絶対操作を行うための道具形状の脳と機械のインターフェースシステム (Absolute-operation Brain-machine Interface System Tools)、オルガノン症候群発症者 (Organum syndrome onset)。それぞれ《マナ》《魔法》《魔法使いの杖》《魔法使い》の正式名称です」

「……？」

つまりグラームに限らず、多くの人々が知っている言葉は、全ては通称だった。

「《魔法使い》とは、オルガノン症候群と名づけられた脳の異常発達症状により、ブロードマンの脳地図における脳機能野が52野以上存在する人間」

オルガノンとは、ラテン語の『道具』を示す。

現代社会の《魔法使い》の素質とは、魔力量などではない。脳だ

けとはいえ、体の仕組みそのものが常人とは違う。

「53野以降の脳機能は、ヒト大腦としての機能とは半ば独立。アナログ的な生物脳としての機能ではなく、デジタル的な機械的性質を示す。個人の人生経験から外部に出力可能な『術式』を自動作成し、世界最高レベルのスーパーコンピューターに匹敵する演算能力を所有する」

つまり《魔法使い》とは、無線式の特別なLANと、知識と経験から『術式』という名のプログラムを自動作成するソフトウェアを持つ、頭の中に生体コンピューターを収めた人間。

「その脳機能は、『塔』から発生し、空間に漂う《マナ》——多機能ナノテクノロジーを通じて周辺の情報を取得、そして『術式』にパラメーターを反映させて通信しエネルギーを与える環境操作——つまり《魔法》を使うために存在する」

Multirôle Attribut Nanotechnology
Artifact——略称《マナ》^{MANA}は不定形の万能の道具。古典物理の『重力』『電磁気力』、素粒子力学における『強い力』『弱い力』などなど、物理法則にのっとった力学制御を行う極小機器群。

どう機能させるかという制御情報と、それに見合うだけのエネルギーを与えてやることで、通信機にも、センサーにも、医療機器にも、製氷機にも、重機にも、粒子加速器としても働く。

フィクションにおける『マナ』との違いは、正体不明の粒子などではないという点を除き、現実とそう変っていないと言えるが変わっていない。

「しかし《魔法使い》単体ではその能力は発揮されない。ある物を

持たないと、普通の人間とはなんら変わらない」

パソコンに例えると、『魔法使い』はハードディスクの本体のみ。扱うためには、状況を確認するためのディスプレイ、操作するためのキーボードやマウスといった入力機器、そしてプリンターやスピーカーといった外部出力機器が必要である。

それに当たるものが――

「Absolute-operation Brain-machine Interface System Tools――略称『魔法使いの杖』。大脳のヒト部分と『魔法使い』部分を無線接続し、思考で環境を操作するためのインターフェース。それを使って『mana』と通信すると共に、内臓されているバッテリーから、莫大な電力を与える絶対操作を行うことで、実行を可能とする」

ゲームとは違い、マジックポイントやスキルポイントといった概念は存在しない。

電力。それが『魔法』の源。

そして『魔法使いの杖』とは『魔法使い』が必須とするアイテムだから、そう呼ばれているだけで、実際は杖ではなくても構わない。ある程度の大きさ内に留め、携行性がないと使いづらく、そしてイメージを重視して、杖の形状であることがままあるが。

余談だが、通信とエネルギーのやり取りを行った際に『mana』は発光する。それがEC-circuitと呼ばれる『魔法陣』。

「それを持つことで、『魔法使い』は考えるだけでなんでもできる」

現代の『魔法』とはつまるところ、物理学に基づいた、ナノテクノロジーによるエネルギーと物質の操作。

常人には不可能に思えることでも、物理法則に基づくことであり、

知識と経験から『術式』^{プログラム}さえ作れば、なんであろうが可能。

『空を飛ぶ魔法』——つまり重力の制御により、宇宙空間でなければ製造できない金属化学の新素材開発。

『炎を操る魔法』——つまり机上の空論だった核融合などの新エネルギーの実現。

『治癒の魔法』——つまりナノテクノロジーによる治療法の確立。誰もが知っているフィクションの中の空想を、科学的に再現させる事ができる。

「あまりにも見た目がそれらしいので、オカルティズムな通称が一般的となって誤解も広まっていますが、『魔法』に関わる一連のシステムは、オーバーテクノロジーと呼べる科学技術なのです」

あるSF作家は言った。

『高度に発展した科学は魔法と区別がつかない』と。

現代の『魔法』は正にそれ。

30年前、世界21カ所に出現した『塔』、そこで生産され散布される『マナ』、そして『魔法使い』の突然発生など、未解明な部分を残しているが、『魔法』というオカルトを、判明できた範囲の科学で、人類は再現してしまった。

「余分な話加わってしまいましたね。CPUやバッテリーなどにも、オーバーテクノロジーと呼べる技術が積まれています。『魔法使いの杖』^{ビストール}とはインターフェース、電子機器なのです。なのでグリームさん？ 修理に電子機器の部品を使おうとする理由、理解されましたか？」

「……………一応はな」

どこか得意気なコゼットに、グリームはようやくといった風に、

呻くように返事する。

日本人相手でも簡単に説明しただけでは理解できない内容を、日本語に慣れているとはいえ、外国人に日本語で説明したのだ。たぶん半分も理解していないだろうとコゼットは推測した。

「あんた……ずいぶん余裕があるようだな？　なぜそんなに落ち着いていられる？」

「グラールさん。王族は常に平常心でいることを求められます。それに私にも子供ではないのでプライドがあります。このような事態に巻き込まれたとしても、泣き叫ぶような無様な姿をお見せしたくありません」

王女の微笑みを浮かべてコゼットが答えた時、不意に事務所のドアが開いた。

入ってきたのは残り2人の誘拐犯。アイマンと名前不明。

「——これデスカ？」

「ええ。それが私の工具箱です」

周囲を包囲する警察を通じて、犯人の要求するものとして届けられた。

アイマンが差し出したのは、『工具箱』という言葉から連想されるものと違い、大きさは60cm×40cm×20cmほど、いい意味で色褪せたアンティークな皮製トランクケース。

「作業に使える時間はいかほどですか？」

古びたトランクの外見とは裏腹に、ロックは指紋認証式。検知部に指を当てながら、コゼットがアイマンに訊ねる。

グラームは未だ彼女に銃口を向けているが、このトランクに武器

が詰まっていることを想定もせず、残りの誘拐犯たちは警戒していない無用心さを、コゼットは内心呆れた。

「1時間デ」

ようやくアイマンの手から《魔法使いの杖》^{アビスツール}が手渡される。

逃走中の使用状況を見て、状態がかなり悪いと想像していたが、手にしてコゼットは改めて驚いた。

市ヶ谷^{いちがや}と名乗るライダースーツの《魔法使い》と戦闘したと、本人から聞いたが、これでは廃棄寸前の壊れよう。発揮できる出力は推定で元の3%以下。それでも動いているのが奇跡だと思える。

しかし動作しているなら、不完全ながらも修理は可能だとコゼットは判断して、この仕事を引き受けた。

「不可能ではないですけど、補修資材も十分と言えませんが、かなり皆さんの修理になります。発揮できる出力は最高でも元の半分以下でしょう。それに形状も大幅に変えることになります。それでもよろしいですか？」

「……仕方ないデス」

開いたトランクの中からケーブルを取り出し、古い形のデスクトップパソコンに接続し、ドライブにCD-ROMを入れてソフトをインストール。

そちらは放置し、延長コードで引っ張ってきた電源に、これまた中に入れているコンセントを接続。

中に詰めていた衝撃緩衝材を取り出し、折り畳んで収納してある機器をセッティング。

最後に取り出したのは、ケーブルが接続された左腕だけの極小マニピュレータ操作用手袋と、顕微鏡の映像を映すゴーグルタイプのヘッドマウントディスプレイ。

旅行カバンと思っていた中身は、顕微鏡と小さなロボットアームが一体化した、携行可能な極小機械作業台であった。

現代の《付与術士》^{エンチャンター}の作業には、床に大きく描かれた魔法陣も、魔女の大釜も必要としない。必要なのはプログラミングを行うためのパソコンと、商用200V電源。

「では、始めましょう」

豊かな金髪を輪ゴムでひとつに無理矢理まとめ、コゼットはいつもと同じ王女の笑みを浮かべた。

00 | 140 PM20:45 世界の理1 (後書き)

英文(?)のルビ振りが不可能なようのため、書き方を変えています。
単語の途中で改行されているので、空白挿入などで修正しようかと思いましたが、表示形式の違いもあるかと思い、放置しています。
しかし我ながらルビが多い……

00 | 150 PM21:00 世界の理2 (前書き)

前書き 検証事項…世界観の説明の仕方。

わざとしてみたとはいえ、ここまでが長かったです……
そして文章も長めです。

完全に陽の落ちた午後9時、修交館学院管理棟・理事長室。

木次樹里きすきじゅりが持ち込んだ材料で作った簡単な夕食を食べつつ、長久なが手くつばめと一緒に見るテレビには、民家に紛れているような小さな工場と、その場を取り囲む多くの車両と警官たちが映っている。

『今日午後7時半ごろ、兵庫県西宮市の精密加工業・三井精機に、覆面で顔を隠した男3人が侵入し、拳銃を発砲し、そのまま工場の事務所に立てこまりました。一時残っていた社員4名の身柄を拘束しましたが、社員1名を残し解放。解放された人質の話では、犯人たちは日本人ではないと思われます。尚、これまでのところ、ケガ人がいるという情報はありません——』

ニュースキャスターの言葉を確認し、つばめはリモコンで電源を切る。

「あの、つばめ先生。今のニュース、人質になってる人が社員になつてましたけど……?」

「誘拐事件でよくある報道管制ってやつ。コゼットちゃんのことを報道すると不都合だから、自粛されてるの」

面識があるとはいえ、つばめは王女を平気で『ちゃん』付けで呼んで、樹里の言葉尻を捉えて教える。

「それよりジュリちゃん、ケガはもう大丈夫なの?」

「私はすりむいた程度ですから……」

《魔法》で治療した今は傷跡を残さず消え、盛大に転倒した時にボロボロになった制服は着替え、今は新しいものになっている。

あれから——十路と樹里が誘拐犯の追跡に失敗し、ケガを負ってから。

重傷を負って気絶した十路は、樹里が《魔法》で治療して事なきを得たものの、犯人たちの車は完全に見失ってしまった。

《魔法》でその行方を探知できるほど、《魔法》は便利でもないし、樹里自身そこまで精通していない。

だから携帯電話でつばめに連絡し、結果、気絶した十路とオートバイを回収し、学校に戻るようになった。

追跡を振り切ることに成功した犯人たちは、条件の整っている工場に立てこもり、人質はコゼットを残して解放。そして解放された社員の通報により、警察が出動し、ニュースのような現状と成っている。

「主犯は《魔法使い》で、今朝のATM強盗犯と同一人物と思われる。それは多分、武器と仲間を集めるための資金。犯人の要求は《^{アビスツール}魔法使いの杖》の修理。そのために《^{エンチャンター}付与術士》とまで呼ばれる技術者のコゼットちゃんを誘拐した」

集まっている情報を口に出して、事件のあらましの推測と確認を行う。

「修理に必要なコゼットちゃんの工具箱は、警察を通じて渡すことになったから、もうそろそろ手元に届いていると思う」

「あんな人の《^{アビスツール}魔法使いの杖》を修理する気なんでしょうか……？」
「間違いない。小細工を仕込むかは、わたしじゃわかんないけど」

脅されているコゼットの状況を考えると、それは仕方がないこと。しかし自分が追跡に失敗し、そんな事態になったことを、樹里は悔しく思う。

「あのシルバーのバイクの人は……」

「正体不明。心当たりは今のところなし。不確定要素なのがちょっと不安だなあ……」

「これからどうなるでしょうか……?」

叱られた犬のように、樹里は上目遣いでつばめに訊く。

「今回はちょっと複雑だからね。誘拐されたのが、あのコゼットちゃん。それに突発的な自体とはいえ、防衛部の部員が関わって、事態收拾に失敗してるから、警察としてはジュリちゃんを関わらせたくないだろうね」

だけど——と、つばめは軽く首を振る。

「《魔法使い》と渡り合えるのは《魔法使い》だけ。《魔法使い^{アレスツィ}の杖^ル》の修理が終わったら、警察じゃどうしようもできなくなる」

相手は人に攻撃的な《魔法》を向けること躊躇しないと、樹里もつばめも見ている。

もし下手に逮捕しようものなら、多くの死傷者を出すことは確かだろう。

「それまでに逮捕しようって動きは……?」

「わからない。けど、コゼットちゃんの立場を考えると、警察上層部は迷うところだろうね。ちなみにルクセンブルグ公国からは非公式にだけど、防衛部^{ウチ}に事態收拾の要請が入ってきた」

「やっぱりここにあったか……」

ガレージを改装した部室の壁際に鎮座している、黒と赤で彩られたオートバイ。

今はどこかに保管されているのか、十路のものもの樹里のもの、パニアケースが外されている。

「悪いな……納車初日に事故を起こして」

オートバイのボディを軽くなでて、謝る。

そして、リアシートの下から車載工具を取り出し、それを使って、転倒事故を起こしたオートバイの様子を確かめる。

服を抱えた樹里が部室に入ってきたのは、その最中だった。

「堀さん……ここに居たんですか」

「ああ、悪かった。勝手にベッド抜け出して」

「や、それはいいんですけど……体はもう大丈夫なんですか？」

「なんともなし。木次の医療魔法のおかげだろ？　ありがとうな」

「や、当然です……」

「あれから事件はどうなった？」

「今は膠着状態じょうちやくとでも言いますか……」

抱えていた服をテーブルに置き、樹里も横からオートバイの整備を眺める。

「バイクの様子、どうですか？」

「ボディの塗装がはげた程度だ」

普通なら、そんなはずはないが、仮に問題があったとしても、車載工具ではできることなど限られているので、十路は工具を片づけながら淡々と話す。

「さすが『^{ファミリア}使い魔』。あの程度じゃビクともしない」

転倒しただけでなく、人を真正面からはね飛ばし、謎のオートバイと激突させて尚、塗装がはげた程度の被害で済まず、恐るべき頑丈さ。

普通のオートバイには、スロットルはハンドルの右しか存在せず、前輪はただ後輪駆動に押されて動くだけ。しかしこの車体には、ハンドルの左側もスロットルとして動き、それで前後輪を独立させて動かすことで、複雑怪奇な機動を可能とする。

派手にエンジン音を響かせても、それは偽装のための音で、実際には電動モーターで駆動している。それも電動バイクは非力という業界の常識を覆し、静止状態から2.4秒で200km/hを突破する、通常考えられないスペックを持つ。

『魔法使い』が使うために作られた自動二輪車、それが『^{ファミリア}使い魔』と呼ばれる車種。

「堤さんはこのバイクのこと、最初に見た時から気付いてたみたいですね？　これって相当珍しいから、知らない人が多いって聞いてたんですけど……？」

「前の学校でいつも乗ってた。走行距離はわからないけど、10000時間は乗ってる」

「え？　いつから乗ってるんですか？」

「13歳。中学生になってからだ」

現在十路は高校3年生の18歳。約5年間で10000時間という数字を達成するには、毎日5時間以上乗っていないと届かない。

そして普通二輪免許の取得は16歳から。

私有地で運転するならば免許は不要だし、モトクロスレースの大会には小学生の部があるくらいなので、ありえなくはないことだが

「だから走行中に立つなんてことも、それなりに慣れてる」

「や、普通の人はバイクに乗っても、そんなこと試そうと思わないと……」

「試す試さないじゃない。前の学校で單車^{オート}を、乗り物にも武器にも盾にも足場にもできるように、訓練させられたんだ」

その話が本当ならば、オートバイという機械の使い方から、違うことをやらされている。

「あの……これ、答えたくないならいいんですけど……」

都市防衛部の部則には『部員の事情を詮索しない』とある。

しかし禁則事項に触れるとわかっていて、樹里はおずおずと訊いた。

「堤さんが言う『前の学校』って……？」

「――木次。怖かったか？」

十路は工具を袋にまとめながら、逆に質問する。

「人に《魔法》を使うのは、初めてじゃないっぽいけど、《魔法使い》と本格的に戦うのは初めてだったろ？」

「……ドロボウさんを気絶させたことがある程度で、《魔法使い》どころか、私を殺そうとする人と向かい合うのは初めてでした」

「それが普通だろうな。女子高生が荒事を経験するなんて考えない

だろうし」

機械をいじって手についた油を、ジーンズの腿部分で乱暴にぬぐう。穴があいて、もう履くことはないだろうから、汚れ拭き（ウェス）にしても問題ない。

「けどな、《魔法使い》は、切った張ったが普通なんだ」

車載工具を収納して、十路が振り向く。

その顔に浮かんでいたのは、諦観にも似た虚無。感情の見えづらい暗い瞳に、樹里は息を呑んだ。

「現実はおとぎ話とは違う。《魔法》は願いを叶えるためではなく、なにかを壊し、誰かを傷つけることにしか使えない」

この世界には《マナ》を操り《魔法》を扱う《魔法使い》が存在する。

しかし現実存在する《魔法使い》は、フィクションの『魔法使い』とは違いすぎる。

「ここはゲームの世界じゃない。《魔法使い》が当たり前に《魔法》を使っても、それが受け入れられる社会じゃない」

フィクションの中の『魔法使い』たちが、敵を焼き、凍らせる『魔法』を使う相手の多くは、現実には存在しないモンスターたち。そんな風に傷つけ、殺して許される存在が、現代社会のどこにいる？

「《魔法使い》なんてファンシーな呼び方するのは日本だけだ。俺たちは世界的には《ソーサラー》って呼ばれてる理由、知らないわ

けはないだろう？」

多くの人々は、その呼び方を聞いてもなんとも思わないだろう。それほど一般化し、ゲームなどではおなじみの名前だが、しかしそれは本来蔑称べつしょうである。

「現代社会の《魔法使い》は、生きた軍事兵器なんだ」

それがこの世界での現実。

《魔法使い》は考えるだけでなんでもできる。今までの技術では不可能だった新たな技術を作ることができる。だから国は彼らを管理し、生活と行く末を保証する。

しかし、もっと単純で効果的な《魔法》の利用方法がある。

それは軍事。

ゲームや小説や漫画で考えてみるといい。生産のために魔法を使う者と、戦闘のために魔法を使う者、果たしてどちらが多いだろうか。

だから建前で言い繕魔法使いつくるくらい、国家はを管理する。特別な学校に集めて教育し、普段はそのような生活と無縁だとしても、いざという時には兵器としよう。

《魔法使い》は考えるだけでなんでもできる。生まれながらに優秀な兵士と化し、現存する何物よりも強力な兵器となる。

故に『普通の生活』など、望むべくもない。

「……………」

《魔法使い》である以上、当然知っている現実を突きつけられて、樹里は絶句して。

「……あはは」

そして納得し、困ったように笑った。

「そっか……堤さんは、そういう経歴の人だったんですね」

常人離れた度胸と身体能力だけではない、オートバイを『オート』と略する組織特有の呼び方、今までも彼の経歴を推測できるヒントはあった。

予備知識がなければわかるはずはないが、しかし納得すれば推測できなかったのが不思議なくらい。だから樹里は渴いた笑いをこぼした。

「俺が昨日までいた学校は、すばしり須走だ」

須走という地名は、元は小さな村の名前だったが、合併により今は住所に小さく残すだけである。

その場所は富士山麓。ごてんぼ静岡県御殿場市近く、陸上自衛隊富士駐屯地近辺。

「防衛庁立須走育成校。仕方がなかった進路とはいえ……最悪の場所だったよ」

それは陸上自衛隊の《魔法使い》養成機関。

名目上、日本は国軍を持たない国だ。テロを企む危険な^{たくら}《魔法使い》の侵入に対応するなど、国防上の必要性があらうとも、このような性質を持つ機関は半ば非公式。

知識と経験から殺傷能力を発揮する《魔法使い》に、軍事知識を持たせ、戦闘経験をさせることで、正真正銘の人間兵器を作りあげる。

実態を文章で並べればB級映画に出てきそうな学校に、彼は所属していた。

「座学でやることは普通の内容じゃない。物理化学は術式を作るために大学レベルの知識を詰め込まれた。歴史と言えば軍事史による戦略戦術。最新兵器も出るたびに勉強させられたし、無線やインターネットの電子対抗手段や対電子対抗手段^{ECM}、爆発物の設置から解除方法も実施と合わせてやらされた。体育の時はもっぱらナイフか素手の戦闘術、本物を使った各種状況による銃撃戦。15歳の時に一般隊員に混じってレンジャー訓練も受けた。最悪なのは長期休暇の時だ。修学旅行と称して、海外の民間軍事会社^{PMC}に研修に行かされて、本物の戦争に参加した」

十路の口元が自嘲で歪^{ゆが}む。

あまり人に見せる表情ではないと、自身でわかっているけど、押さえられない。

「その時、《魔法》で人を殺しまくって……嫌気がさした時、俺は《魔法》が使えなくなった」

心的外傷後ストレス障害。

テロ事件、事故、災害、そして戦争など、忍耐の限界を超えたストレスを体験した後^{わづら}に生じる心身の障害を、彼は患った。

そして彼は人を殺せない兵器となった。

そして育成校を退学させられた。

いくら貴重な人的資源であろうとも、役目を果たせない軍事兵器に、存在価値はない。だから廃棄されるのは当然のことだ。

彼の家族である南十星^{なとせ}は、それに怒っている。

顔も知らない大人たちの身勝手な理由で、家族を連れて行って人

生を狂わせ、そして今度また勝手な都合で十路は捨てられたのだから。

しかし本人は醒めている。

相手は政府や国家機関。文句を言ってどうにかなるものではないし、それは仕方のないことだと思っている。

「……………」

「引いただろ？」

なにも言えなくなった樹里に、十路は当然だと皮肉めいた笑みを浮かべて、自分の掌に目を落とす。

今は機械油に汚れた手は、見えるはずのない血にまみれている。

『普通の生活』なんてありふれたものさえ、持つ事ができなくなつた手。

だからこそ、堤十路はそれを渴望する。とても小さくて、大きな願いを。

「……そんなこと、ないですよ」

十路の右手が、樹里の両手に包みこまれた。

武骨な男の手とは違う、女の子らしい小さく細い、白い手。

「木次……？」

「堤さんの事情を聞いてしまったから、私がこの部活に入部している理由、少しだけお話ししますね」

重い話の後なのに、樹里は照れくさそうにはにかむ。

「都市防衛部部則第4項『学生らしくあれ』」

『《魔法》を悪用しない』『自主性に責任を持つ』『部員の事情を詮索しない』『学生らしくあれ』
それは4つある部則のうち、最も意味のなさそうな項目。

「学生は、普通に学校で勉強して、普通に友達と遊んだりして、普通に生活していればいいんです」

「だけどそれは、彼女たち《魔法使い》——生きた軍事兵器には、最も大きな意味を持つ。」

「学生のやることに、戦争や人殺しは、含まれていないんですよ」
「……そうか。あの項目は、そういう意味なのか」

「はい。だけど《魔法》を使える人間には、どうしても義務が生じます」

「大いなる力には、大いなる責任がある……そんなことを言ってた映画があったな」

「それは事実です。だから私は《魔法使い》として、だけど兵器としてではなく別の形で、誰かを助けるためにこの力を使いたい……その願いを叶えるために、私はこの部に入部しています」

きつと樹里は人を殺したことがないだろう。

だからその言葉は、なんとも子供じみた、現実の见えていないセリフと考える。

しかし十路はそれを馬鹿にすることはできない。

人を殺さない兵器の価値のなさ、非殺を実現することの難しさを、身をもって知っているから。

「私は、あなたのような人だからこそ、歓迎します」

神に祈るように、胸に抱くように、十路の手を包みこむ力が強く

なる。

「強制はできません。だけどどうかこの場所で、あなたの願いを少しでも叶えてください——堤先輩」

「……………」

十路は自身を受け入れる言葉に、呆然として動けない。

「……………」

樹里は安心してもらいたくて、体温を与えるように手を握り。

「——ふえあ!？」

不意に自分のしていることに気づき、樹里は顔を赤くして手を離れた。

「あ!？ や!？ ええと!？ その!？ すみませんでした!？」

「あー……いや、別にいいけど……」

顔を赤らめる純情な樹里に、十路も戸惑う。

「木次はもう少し男を警戒した方がいいと思う」

「え？ そうです？」

「初対面の俺となんの抵抗もなくしかもスカートで2人乗^{タンデム}りするし、平気で俺の体に触ってくるし」

「や、2人乗^{タンデム}りは慣れてるのと、仕方がなかったのもありますし、手を握ったのは半分無意識で……」

「あとパンツ全開でヒップアタック顔面にカマしてくれるし」

「あれは不可抗力です！　ってゆーかそれは忘れることになったじゃないですかあ！」

「木次の性格から推測するに、たぶん誰にでも同じようなことをして、男に『気がある』と勘違いさせてる気がする」

「あの、私はどういう人間だと思われてるのでしょうか……？」

「例えるなら、誰にでも人懐こく尻尾振って、番犬^{ワンコ}としては役に立たない犬？」

「ワンコ……」

十路は苦笑。樹里は軽い落胆。軽口で先ほどまでのシリアスな空気が霧散したが、その中で少しだけ、真剣に十路は話す。

「……木次。どうして俺を受け入れようとする？」

ただ《魔法使い》という同族意識だけではないはず。

普通ならば、『人を殺したことがある人間』に、そんな事は言えない。

「色々ですね。失礼なのは承知で言いますが、堤さんを見てられないっていう、哀れみの気持ちもありますし……」

樹里は首を軽く傾げて言葉を選び、そして笑顔を浮かべて答える。

「決め手になったのは、堤さんの匂いでしょうか？」

「は？」

「私、鼻が利くんですよ。それで堤さんの匂いをかいだ時、『この人の匂い、なんだか安心するな！』って思ったので」

「匂いで判断って……やっぱり犬^{ワンコ}？」

「やっぱり私って犬っぽいんでしょうか……」

樹里のお人よし加減がここまでのレベルだと、十路としては呆れるしかない。

「それに、これでも少しは人を見る目は持つてゐるつもりです。堤さんが、好きで誰かを殺す人だとは、到底思えません」

「当たり前だ……あんなの誰が好き好んでやるか」

「だったら信用できますよ」

まほうつかい
生きた軍事兵器としてはあまりにも純真な樹里に不安を感じ、同時に十路は、その純真さを自身にも向けてくれることを嬉しく思う。

ならば彼は考えてしまった。

『魔法使い』は願いを叶える存在だと、この少女が言うならば、『魔法使い』である自分は、彼女の願いを可能な範囲で叶えようと、いつものトラブルご免のなあな主義は、少しだけなりを潜めて。

「木次。事件の現状の詳細と、防衛部としての対応を聞かせてくれ。俺はどうすればいい？」

「え？ や、堤さんみたいな人に、力を貸してもらえるのはありがたいですけど……いいんですか？」

「俺は体験入部中だから、参加するに決まっている。それに『魔法』を使えない『魔法使い』でも、荒事には前の学校で慣れてるから、力にはなれる」

「トラブルに巻き込まれるのはご免って言ってませんでした？」

「放置した方が大きいトラブルになるなら、その限りじゃない」

「あはは……確かにそうですね」

樹里はひとまずテーブルに置いた服を手に取り、十路に差し出した。

「お話しする前に、服を着替えてください。今の格好、ボロボロですし」

「……この服、誰の？」

「つばめ先生が用意した新品ですけど？」

「また理事長か……」

つばめの策略めいたものが見え、十路は軽く顔をしかめながらも、新品の服を受け取った。

00 | 150 PM 21:00 世界の理 2 (後書き)

当方、情報は足りないよりは、余るくらいでいいと考えている人間です。

でもこれは長いとも思っています。要反省。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0589ba/>

SSSS

2012年1月13日19時01分発行